目次

思想問題……本多日生
本經組書要文講義……本多日生
自然國家と不自然國家……宮岡直記
日蓮聖人教義綱要……井村日咸
遠慮なき皇道大本教の批判……記者
記事報道十數件

第廿五年十二月號

聖誕七百紀念出版

日蓮宗法要式

日蓮宗管長 河合大僧正題字　日蓮宗大學長 風間權大僧正題字　日蓮宗大學教授 北尾日大先生編著

日蓮宗日蓮主義の實踐的方面に於ては信行を根本とす。而して信行の要は朝夕の勤行及び月次年次等の法要儀式を勵行するを以て第一とす。然るに古來完全なる法要信行の書無し、著者之を慨すること十年、苦心研鑽の結果本書を著して此缺陷を補はんとす。第一篇常時法式には日課、週次、月次、年中の諸式を掲げ、第二篇特種法式には禮法華會、施餓鬼會、放生會、新騎經、改宗式、得度式、晋山式、結婚式、葬儀等の諸式を示し、第三篇諸回向文には四十餘種を列ね、第四篇法華要品には二十品を載せ、第五篇信行要文には經前經後、唱前唱後六十餘文を選び、第六篇聖讃歌には一般讃仰歌及びコドモ會諸歌を集め、第七篇雜部には諷誦、勸德、奉告、祝辭、平祭文、七十餘例を擧げ、且つ附するに改名字選を以てす。凡そ本化信行法式の各方面を網羅收錄して遺憾あることなし。願くば五千の住職者諸師、二百萬の信徒諸氏、五百の學生諸君乃至一般日蓮主義讃仰者諸彦、奮て一本を座右に備へられ、以て信仰の正軌、法式の指針に充てられんことを。

紫羽二重金文字入　七百頁
正價金參圓五拾錢
十一月中特價金參圓　送料十二錢

五大特色

一、本化組織宗學の見地よりして諸種の法要儀式を最善に分類し整束し且つ統一あらしめたる點。
二、法要信行に必要なる法華要品觀書要文を編入して如何なる法式にも此一冊にて事足る樣至極便利に編輯したる點。
三、年中行事三十八種特種法式三十餘種等の下一々に適當なる御書を選拔配合して日蓮主義を法式上に發揮したる點。
四、日課月次年次等の重要法式を一々具體的に羅列し以て實用に適切ならしめたる點。
五、本正的方面の新式も實行に適し傳統的方面の古式も亦非宗義ならざる樣特に注意を拂ひたる點。

發行所　京都市東洞院三條上ル　振替大阪一三〇六五番　平樂寺書店

時言

思想問題

本多日生

一、人間觀

ロ、五の正觀

それからもう一つの方のことを簡單に申上げます。それは正しい觀方であります。其の一つは人間觀である、人間だから人間のことを知つて居る筈であるけれども、此の位解らぬものはない。自分のことを考へて御覽なさい、自分はえらい者か馬鹿な者かと考へて見ると、えらいとも思はれるけれども、馬鹿だとも思はれる、自分は癖持か優しいかと考へると、癖持でもあり優しくもある、此位解らぬ者はない。昔から此の宇宙に在る總ての物は研究の結果大抵の物は正體を見屆けることは出來るけれども、人間の正體位見屆けられぬものはない、一番怪物である、天地間の怪物は己てある。化物を研究して見ると色々傳說があるけれども、段々突止めて見るとそれは皆人間である、大本教なら大本教が色々な事をやる、何があるかと突止めて見ると其

中に居る或る人間がやつて居る御化てある。私が住職した寺に山門があります、幽霊が出ると言つて日が暮れると檀家が來ない、夜説教して見やうと思つても山門から幽霊が出るといふので誰も來ない、段々調べて見ると前の住職か其前の住職かゞ日が暮れると女を寺に引張り込む、女を寺に引張り込むのに人が來ては工合が悪いから幽霊になつて山門の所へ二三遍出た、それが評判になつて山門に幽霊が出るといふことになつた、本當か嘘かと言つて若い人が行つて見ると出て來たから本當に出るといふ評判になつたので、夜は誰も來なくなつた、日が暮れて女を引つ張り込むに都合が好いからさういふことをした、幽霊の正體などゝいふものはそんなものてある、けれども其れは人間がやる、人間の考の中から出る、實に是は分らぬものてある、それを今は人間の人格とか人間はえらいものだとか云ふことだけ言ふ、偉い者に違ひないけれども、又人間位恐るべき者はない、人間位無放圖な奴はないといふことを兩方言はなければならぬ、唯えらい〳〵と調子に乘せたならば、それは仕方の無いものてある。

そこで古來聖人の教、賢哲の教は人間の弱點を教へて居る、佛教で言へば佛は煩惱といふものから人間を分析して、玆に貪慾あり、瞋恚あり、愚痴あり、邪慳がある、なか〳〵油斷のならぬものてある、此の胸の中には地獄もあれば餓鬼もある畜生もあるといふことから、なか〳〵油斷のならぬといふことを警告せられた、孔子ても矢張りさういふ人の性は善いものてあるけれども、そこに氣質の性といふものがある、天の性を受けたものはなか〳〵立派だけれども、其のお父さんお母さんの氣質を受ける時分に變挺なものが這入つて行く、親爺が他所へ行つて博奕を打つて錢を取られてしまつた、歸りがけに一杯飲んて勘定が出來ぬのて、其處の女中に文句を言はれ、馬鹿な奴だと言はれてブン〳〵して歸つて來る、自家の方ては家内が嫉妬を燒いてブツ〳〵言つて居る、其處へ歸つて來て其處らの鐵瓶ても引つくり返して灰神樂を起したといふやうなことて、兩方共ボン〳〵言つて居る時に拵へた子供ぢやといふと、灰神樂の上がつたやうな子が出來る、所がそれがどうもなか〳〵一々床の前に坐つて線香ても立てゝ、是から大事の息子を仕込むから俺の頭は三角の頭を戒めて中庸不偏になる、お前も女らしい頭になれ、俺の頭には富士の山を描く、お前の頭には吉野の櫻を描けといふやうにするといふことも出來ないが、兎に角人間はえらい者てあるけれども、一方には變なものが附いて居るから、其處を戒めて少くとも日に三たび我身を省る、最小限度に於て日に三たびは却々やゝくさな頭てあるから省よと言つて聖人が教へた、それが一ヶ月經つても自分て頭を叩き反省することをしない所ぢやない、誰が言つても聽かぬ、斯樣な方法を以て人間を教育した時には必ず失敗する、自分の息子なら息子をさういふ調子てやつて御覽なさい、ヒョン〳〵頭を突張るやうに仕立てゝ行けば十七八にもなれば、もう親の言ふことも聽かぬやうになる、學校へも行かぬやうになる、さういふものぢやない斯ういふものぢやないと言つて相當な反省をさせることが必要てある。抑へるばかりぢやない、立派な所があると言つて褒めることも必要てあるけれども、それと竝んて一方に於て抑へて行く、反省させることを忘れてはいかぬ。

所が其やり方を今日は間違へて居る、人間の最も善き所を發達せしめて悪い所を抑へなければならない、先帝の御製にある

ともすれはかきにこしけりやまみつの
すませはすますひとのこゝろを

元政上人の歌に

こゝろこそこゝろまよはすこゝろなれ
こゝろにこゝろこゝろゆるすな

斯ういふのがある、人間といふ者はなか〳〵面倒なもので一筋で行かないものである、それが毎日々々變化極りなきもので、昨日は善人であるが今日は惡人である、朝は優しい人であるが午後は癇癪持である、實に變化極まりない、だから聖人は前に在るかと思へば忽焉として後に在りと言ふて居る、向ふを向いて行くかと思ふと、つゝと此方を向いて來る、眞直に行くかと思ふと横に行つて泥渠に這入る、諸君の行爲を能く考へて御覽なさい、なか〳〵ちやんといかぬ、眞つ直に行く積りであつたが、給料を貰つた、横に銘酒屋がある、這入つて一杯飲む、それから酒が這入ると頭がフラ〳〵して來るから變な事を考へる、後から考へて見ると詰らない、大分懷の錢が減つたといふことになる、それが一度や二度ぢやない、何遍も繰返す、餘程妙なもので何遍もやつて居る、それ故に人間を墮落に導くことは非常に宜しくないことであらうと思ふ。

二、宇宙觀

それからもう一つは宇宙觀であつて、天地を冷やかに見たならばどうしても人間は惡くなる。仰いで天を見ても有難くも思はず優しいとも思はない人間になつたならば人の心は荒む、矢張顏を洗ふて天を見たならば其處に神ありと思ひ佛ありと思ひ、感謝の心を起す、そこまで行かないでも仰いで天を見れば何となく氣持が宜い、大空の濟み渡りたる爽けさ、それを己が心と見るやうに、のび〳〵した氣持になるのと、空を見ても煙が出て居つて焦立つて來るのと、そこに人間の成立つと成立たぬとの相違がある、都會の生活をなすには唯だ忙がしく電車に乘れば大勢人が乘つて居る、家は小さな家に住まつて居る、煙が濛々して居て空氣が惡い、刺戟が多いからいら〳〵する、そこて人間の心が荒む、幸に横須賀は海もあり山もある、非常な空氣の宜い所であるから、そこて顏を洗ふた時分に天地に對して感謝するやうな精神を持つやうになつて參れば、自分の存在、自分の生存、皆是れは天地の惠によつてあるので、天の惠がなければ、一日も存在は出來ぬ、植物も着物も水も空氣も天地の物である、自分の體も能く考へて見れば全部天地から與へられて居る、自分の持つて來た物は髮の毛一本無い、皆天地に產出したもので、頭と言つても體と言つても皆さうである、我れの物だと云ふものは何も無い、若しありとすれば中の無形の精神は自分の物か知らぬけれども、それても頭が壞されてしまへば精神はフラ〳〵幽靈になつてしまふのである。皆天の惠である、それを知らないで「コラ、天が」と言つて居る、天地に對しては優しい感じを持つといふことをしなければならぬ。西洋では是が壞れた、西洋でも宗教の勢力のある時分には矢張り天地の惠を歌ふたけれども、現代の思想は天地を呪ふやうな考を持つて來た、それが非常な惡いことになつて來た、社會主義も其處から起る、此の文明破壞の運動が殆んど是から現れて居ると言つて宜からうと思ふ。

三、社會觀

もう一つは社會觀であります。人間の世の中はどうして出來て居るかといふと自分の利益を本にして論

を立てた時には衝突である、お互自分の都合々々と言つた時には衝突する、譲合をしてこそうまく行く、電車に乗る時に皆乃公が乗る乃公が乗ると言つて突飛ばしたら喧嘩が出來る、皆乗つて行きたいけれども席を譲り合ふて程好くやるといふことにならなければならぬ。所が今日の思想は自分の權利を主張しないのは馬鹿者だといふことて突飛ばしても乗るといふことになつて來た、前には西洋あたりては非常な美點があつて汽車に乗つても席を譲らぬ人はなかつたが、昨今歐米を視察して歸つて來た人から聽くと、大きな顔をして居つて譲る人が無いといふことである、日本の狀態が恥しいと思つて居つたが、日本所ぢやない、向ふの方がひどい、てんと極め込んて居る、それては迚も世の中はうまく行くものぢやない、家の内て考へてもさうてある、親爺は親爺て勝手を言ふ、嬶は嬶て勝手を言ふ、お母はお母の勝手を言ふ、息子は息子て勝手を言つたならば一家はうまく行くものぢやない、そこをうまく譲り合して行く、御飯の御菜を一つ作るのても俺は蒟蒻は嫌てある、俺は味噌汁は嫌てあるといふのては迚もいくものてない、味噌汁は嫌ひても朝は味噌汁て辛棒する、味噌汁が嫌なら香の物て濟まして置く、それを俺の嫌な味噌汁を何故拵へたかといふと、お婆さんの方は味噌汁が無くて朝の御飯は食べられぬぢやないかといふことになる、物は小さな事てもさうてある、大勢の人間が寄つて作る社會て自分の勝手を押捲くるといふ議論て世の中がうまく行くと思ふ程安本丹に頭が出來て居ればお仕舞てある。事實いけさうなことがない、事實やつて見ていけないから困つた、困つたけれども困つたと言ふなとクロポトキン等は言つて居る、今までのことをやり損つたと言ひたいけれども、さうは言ふな、もう一つ押切つたらいゝ、然し押切つたらどうなる、饑餓などて死んでしまふ、死んても弱つたと言ふな、さうすると餓饉になつてしまふ、餓饉になつたらそ

の中から草が生える、草が生えたら幽靈になつて出て來い、それても謝つたと言ふなと言ふのてあるから實に亂暴極まるものてある、そこ迄惡心に取掴まへられゝば問題はない、もう人間が餓饉になつて饑饉て斃れて其處へ草が生えて幽靈がヒョロ〳〵出て怨めしいと言ふ、それて宜いと言ふならば文明の問題はない、皆の國民が野倒死して餓饉になつて、それても宜しいと云ふのて捨鉢になつて人間の問題が起るか、彼等はなか〳〵亂暴てある、社會はどうしても相互的にいかなければならぬ、彼等の說く社會主義は唯の社會主義てない、社會破壞主義てある、社會といふものは持ちつ持たれつてある、持ちつ持たれつと云ふのには其處に情といふものがなければならぬ。所謂旅は道連れ世は情、情は人の爲ならずと言ふて、情が人間の社會を構成する原理てある、情とは己を幾分犧牲にして人の爲にするといふのが情てある、己の權利利益を主張して情といふことが何處にあるか、是も西洋の人が賢いやうに言ふけれども、どうも是は贊成出來ない、贊成出來ない所ぢやない、今まて夢だと考へて居つた、それを本當のやうに向ふて言ふ、こちらて贊成する、吾々驚いて居る、向ふて嘆語を言ふて居るのに眼の醒めた奴が寝言の稽古をしてそれから奴鳴りますと云ふ、嘆語を言ふ人の傍てそれを眞面目に稽古する人があつたならば滑稽至極なものてある、彼等は嘆語を言ふのてある、嘆語を受賣して眞面目な人間がガヤ〳〵騒ぐこと程おかしなことはない、だから諸君、社會主義も何もそんな面倒なことはいらぬ、旅は道連れ世は情てある、決して我が身勝手なことを言つて世の中がうまく行くことはない、六ケしい學說も要らぬ、本當の眞理は坦々砥の如しと言つて、大眞理はさう入込んだ面倒なものてない、それを社會主義の講釋を聽いて見ると何處へ這入つて行くのか分らぬ、目隱しをしてクル〳〵連れ廻られて此處が本道だと言つて突つ放されては分らなくなつてし

まふ、それだから聽いても聽いても分らぬ、本當の眞理はさういふものぢやない、今勞働問題でも優しい考を言ふと、そんな事はいかぬと云ふけれども、優しい顏をして欺すのがいかぬ。本當の優しい考が勞働問題でも政治問題でも缺けてはいけなくなる、神樣の前へ行かうが天國へ行かうが本當の優しい考に敵するものはない、それを優しい考はいかぬ、喧嘩でなければならぬ、勞働團體は喧嘩で行かなければならぬ、資本家と妥協してはいかぬといふのは無事に行くべき事でも面倒にするやうなことになる、此間神戸や大阪でストライキをやつた、さうして彼等の團體が舞鶴工廠の方に行商に行つた、罷工職工が行商となつて石鹸や繪葉書を大勢賣りに行つた、所が誰も買はぬ、左樣な事をして國家を騷がす者は買つてやれぬと云ふ、誰が買ふたか知らぬが總計一圓六十錢の賣上を以て汽車賃が足らぬと言つて逃げて歸つたといふことを聞いた、吾吾は國家の事業をやつて居る、軍器の製造をやつて居る、帝國を護る船を造つて居る、幾ら働いたからと言つても誰が儲ける譯でもない、一錢の金も利益するのぢやない、國民全體の負擔する國費で國防を全うするのであるから、お前等のやうな勞資の喧嘩をした者が此方へ來て石鹸を買ふて呉れと言つても買ひはせぬと言つて買はない、舞鶴の職工はえらい、横須賀の職工はそれよりもえらいといふ評判が昔からあるから、今頃勞資問題が起つて來た所で、こちらでは資本家が無いから何處までも立派な考を以ておやりにならなければなるまいと思ふ。

四、國家觀

それからもう一つは國家觀である、國といふ問題、昔から大事に言つて居る、近頃之を疑ふ者が出來て來た、國々と言つても吾々は詰らぬといふことを西洋の人が言ひ出した、大きな戰をして只殺されて、只働さして詰らぬと言つて居る、今日の戰では勞働者が隨分不利益な地位に居る國もありませうけれども、併し敗けた國はどうか、獨逸は非常な哀れな狀態である、今日ばかりでない、今後がさういふ有樣になつて行く、小さい事を言へば一國内で誰が歩が宜かつた、誰が歩が惡かつたといふことはあるけれども、國家問題となつて考へた時にはどうしても其國を守り支へて行かなければ、所謂鷸蚌相爭ふて漁夫の利となる、國民が分離して資本家と勞働者と戰つて居ると、國の存立が危くなる、所があちらでは戰爭の時につけ込んでストライキをやれと言つて國全體の問題を忘れて大事な時にストライキをやる、恐るべき事は勞働運動は人の困る時にやる。英吉利のやうな國でもあの戰爭の最中大砲を拵へなければならぬ時に軍器製造の職工が幾度ストライキをやつて居るか分らぬ、それは激しい、彈丸が足らぬ大砲が足らぬといふ場合に、宜い機會だ、此處でやつたら弱るに違ひない、やれ〳〵と云ふのでやる、彈丸を拵へて呉れ、今が大事な所ぢやといふと、其大事な所ぢやからやるのぢやといふのでやつて居る、佛蘭西側のヴェルダンの戰に非常に獨逸が烈しくやつて行つて、もう少して落ちる、落されては大變だといふ時にストライキをやる、實にひどい事である、勞働者はなか〳〵大切なものであるし、勞働者の上に就ても幸福といふことも考へなければならぬけれども、唯だ煽動する者に乘つて國家の大事を忘れて勞働運動をやるやうなことがあつては實に恐るべきことになる、日本では私はさういふやうな人は無からうと思ふ、國が大事な場合、さア大變だ、彈丸がない、彈丸が無くなるといふ時分に、彈丸を拵へる職工がストライキをやるといふことは出來まいと思つて居るけれども、どうぞ其處をお考になつて國といふものは國民の爲に大切である、國を

通して國民の幸福は保全されて居る、船が無事に浮んで居るから其中に乘つて居る總てが幸福を得るのである、火を焚いて居る者は熱いとか艦長は樂だとかいふ問題はありませうけれども、艦長が憎いから船を引くり返してやるといふことになつて、引くり返したならば火を焚いて居る者も共に溺れる。そこであります、國家といふ問題になれば小さな利害を超越して心を一にして行かなければならぬ、多少は何時の時代でも議論がある、國民の間に政治上の利害關係、經濟上の利害關係、宗教宗派の利害關係、さういふことで多少の不平はあるけれども、國家の大事といふことになつたならば、それを棄てゝ進んで行くのが日本の國民のえらい所である、それであるから國によつて國民全體の幸福を圖る、又國を通して立派な理想が世界に行はれて日本が榮えて行かなければ東洋の文明を維持することは出來ぬ、東洋の平和を維持することは出來ぬ、尙ほ進んで言へば世界に貢献することは出來ない、其國が弱つてしまつて世界の厄介になるやうなことでは何にも世界に盡すことは出來ない、日は東より出てゝ西に入るといふやうに世界の龜鑑にならうといふことを考へて、餘程日本は進んで行かなければなるまいと思ふ。

五、人文觀

もう一つ考へなければならぬことは文明全體的のことである、是までの文明今までの文明を壞して造りなほすといふことは間違つて居る、昔の人が折角拵へて呉れたのであるから過去の文明を大切にして、どうしても變へなければならぬことは變へるけれども、先人の功を尊び、先人の遺風を尊んで新しきものを開拓して行かなければならぬ、親父の物は良くない、例へば今まで使ふて居つた鉋が粗末であれば鉋は新しい鉋に替へるにしても、斯んな馬鹿な物を使つて居つてといふやうなことを言ふてはいかぬ、それがあつたから家も出來、自分等も命を繋いで來たのである、斯んな粗末な鉋でも親父が使ふて自分等を養育して呉れたかと思へば古い鉋でも大切にするといふことがなければならぬ、西洋の人は斯んな物を使つて居つたからマゴ〳〵して居つたのだと言つてボカリとやる、驚くべき事である、過去の文明を保存して更に之を完成發揮して行くといふことでなければならぬ、今のやうに古い物はいかぬといふことはいかぬ、古い物でも良い物は無論であるが、縱令良くない物でもあれは先人のなさつたものぢやとして之を大切にしていかねばならぬ。それであなた方の家に古い物詰らぬ物があつても、それを無下に棄てゝはならぬ、それを見るにつけても先人の功を感謝せねばならぬ、古い提灯なら古い提灯、親父の下げた小田原提灯、今は之を下げることはないけれども、見ると何となく古色があつて、親父が之を下げて東海道を通つたかと思ふと懐かしくて棄てられるものでない、何に此のやうなものは要らぬ、今は電氣があると言つて泥の中に打ち込むことは日本人は出來ない。其事さへ覺えて居れば本當の文明が完成して行くのであります。色々申上げたいことが澤山ありますけれども時間が參りましたから是で今日は御別れ致します。（了）

本經祖書要文講義

本多日生

六、得益

得益篇は、法華經の信仰に依りて得られる所の御利益はどういふものかといふ事を示す爲に撰んだのであります。一般の考は、信仰と言へば直ぐに病氣の癒る事、又死んで佛に成る事といふ風に考へるのであります、それも利益の一部分には相違ありませんけれども、法華經の利益として考へなければならぬのは、現在生活の上に就ては總ての苦みを除き去る信仰の力、總ての罪惡に打勝つ所の信仰の力を認めなければならないのであります。病氣も苦みの中の一種であるけれども、人間の苦悶は肉體上の病氣を除いたからと言つて、それで悉く除かれるのではないのであつて、非常に澤山な精神的の煩悶があり、又物質的の苦痛にしても、身體が達者であればそれで宜いといふやうな簡單なものではない。又人生には複雜なる關係があつて、自己が苦しまないでも關係者の上から起る苦痛、即ち自分は達者でも妻が病氣であるとか、子供が死ぬとかいふやうな事があつて、非常に複雜なものである。然るにその總ての煩悶に對して、信仰の力に依つて之を除き得るものでなくてはならぬ。又人間には春外罪惡性が强いものであるが、それが信仰と共に次第に煩惱罪惡が除かれて、人格を完成して行くといふことに現はれて來なければならぬのである、それを唯だ小さく考へて教へるのを迷信といふのであります。それから尙ほ宗教は永遠の生命に就て考へねばならぬから、それに就ては成佛を目的にするのであるが、その成佛に關する意識を明らかにしなければ、唯だ成佛が出來るのだといふ漠然たる考ではいかんので、餘程明瞭なる意識を要求するのである。その意識が今度離つて現在生活の慰めとなり力となつて來るので、その點が不透明であると、理在生活の力となつて來ない譯である。これは二つのやうであるけれども往いては一つのものになる、現在と言ひ未來といふことは、法華經を信じない人の上にはさういふ區別が强く現れて居るけれども、信仰を決めた人の上には現在と未來とが疎通されて行くのである、生きながら不滅の生命を認識して、現在の苦痛と戰ひ、現在の罪惡と戰つて、現在よりして既に不滅の生活に入つて居ることがハッキリ意識信仰されて行かなければならぬことになると思ふ。

それは個人的に考へた現在未來の利益であるが、今度はそれが社會的に國家的に進んで行かなければ

ならぬ、人間の道德は個人的に考へたことが今度は社會奉仕の精神となり、國家に貢獻する精神となり、大にしては人類全體に對して博愛の精神に行くが如く、法華經の利益はやはりそのやうな廣い範圍に力を現はして行かなければならない。殊に日蓮聖人はその點を非常に强く發揮せられた、それは屢〻論じた如くに廣宣流布の大願、立正安國の大願を通ほして、この正法を盛にすることに力を添へ、又日本の國を榮えさすことに力を添へて、この法とこの國とを通ほして內には社會の向上を促し、外には人類の文化を助けて行くといふ社會の問題も人類の問題も、この國と法との二つを中心にして內外萬事に及んで行くことを明らかにしたものが法華經の主義で、即ち吾々がその利益を說明する場合にも、さういふ働の出來るやうな大きな人格に上つて行くことが一番大事な點であらうと思ふ。それ故に日蓮主義者であつてもさういふ思想、さういふ活動に力を盡す元氣が出て來ない間は、御利益を受けて居らぬといふことになるのであつて、病氣が癒つた位のことを以て直ちに法華經の御利益だと考へて居る如きは、所謂迷信的の思想と言つて宜からうと思ひます。

大體さういふやうな事を考へて置いて、此處に摘出してある經文なり遺文なりを見れば、一層その意味が明晰になつて參らうと思ふのであります。

四七、神力品　如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及び次第を知つて、義に隨つて實の如く說かん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯人世間に行じて能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩を敎へて畢竟して一乘に住せしめん。

この『神力品』の文は、上行菩薩が出現して佛敎の爲に盡す時の有樣を、釋迦如來が賞讃して說き置かれた言葉で、上行菩薩出現して日蓮聖人となつて來ての以後の働きを釋迦が豫言して、斯ういふ事をするのであると言はれた有名な經文であります。

この法華經を委託された所の上行菩薩が、如來の滅後に出てどうするかと言へば、佛の說いた種々の經經に對してその因緣と次第とを見分けて——「因緣」といふのはこのお經はどういふ事から起つた、例へば阿彌陀經とか觀經といふやうな淨土宗のお經は、阿闍世が太子であつて不孝の子で、父を殺してしまひ、母を座敷牢に入れて苦しめて居る、それが爲に母が非常に悲觀して居るのを釋迦が慰める爲に說いたものである、何も釋迦が出世の本懷を說くといふやうな大きなものではない、權力を有つて居る者が父を殺して自ら國王となつて、さうして母を虐めて居るのであるから、警察官をつれて行つて救ふ事も出來なければどうする事も出來ない、最高主權者がさういふ不孝な事をやつて居るのであるから、これはどうしても未來觀の思想に依つてこの母を慰めるより仕方が無いから、「もう人生には希望を置くな、日の西に沒する時を見よ、彼方に阿彌陀如來が在つて、お前が呼吸さへ引きとつたならば直ぐ助けて下さる」といふのは、最早や人生に望みの無い婦人に對して、救ふべからざる狀態に於ての適當なる慰安の方法として說いたものである。それはそこに釋迦の慈悲の現れを見ることが出來る、阿彌陀の慈悲を見るといふよりは釋迦の親切がこの婦人を導いて、

その苦痛の中にも悦びを以て死に向ふことが出來るやうに教へたといふことに於て、釋迦の智慧と釋迦の慈悲の偉大なることが見られるのである。さういふやうに說くのが經の因緣といふ事である、法華經はどうして起つたかといへば、釋迦が出世の本懷を說かんとして、先づ無量義經を說いて總ての教の方便なりし事を喝破して、これより眞實を說くといふことになつた、斯ういふのが經の因緣である。どのお經でも何故に起りしかといふ事も考へずして、唯だ自分の好き嫌ひといふやうな感情から之を採るとか採らぬとかいふことは、實に暗愚な方法であるといふことを知らしむるのが、經の因緣を明らかにするといふ事になる。それから「次第」といふ事は時間を云うたのであつて、佛が教を立てゝ行くに就ては、最初から完全なものを與へることは出來ない、種々に導きを與へて、丁度學校の教育でも淺い所から次第に深いものに移つて行くやうなものであるから、小學校の教科書であつたか中學校の教科書であつたかといふことも知らないで、唯だ教科書と言へば同じ物だといふやうな見方をしてはいけない。釋迦が一代五十年の大化導は、順序次第を立てゝやつたものであるといふので、その教を說いて來た時間の順序を明らかにして行く事である。さうすると前四十二年は方便を說いて、後八年に眞實の法華經を說いたといふことになるのである、さういふ事を上行菩薩が明晰に知られる。これは「因緣」と「次第」といふ事だけ擧げてあるけれども、尙ほそれに伴うて種々佛教を判斷して行く所の標準を明らかにして行くのであつて、さうして「義に隨つて實の如く說かん」て、佛教の文字とか章句とか皮相の見解に依らずして、その眞意義を取つて佛教の歸着を明らかにして行く、眞實の意味合を說くものである。それ故にこの上行菩薩の活動よりして得る所の利益は、恰も日月の光が世間の幽冥を除くやうに、この上行菩薩が出て世の中に働く時分には、能く衆生の闇を滅するのである。「衆生の闇」とは心の迷ひを指すのであるから、前に言つた苦悶と罪惡を闇といふのである。「世間に行じて」といふは「活動して」といふやうな意味で、世間に出て働くことをいふ、佛教では「行」といふ字は現はれて活動して居るものゝことをいふので、「理佛性」「行佛性」などと言つて、內に潛んで居る佛性を理佛性と言ひ、外に現はれて動くのを行佛性といふ。さういふ譯で上行菩薩が、此の人生に現はれて活動するから「斯の人世間に行じて」といひ、さうして人々の心の闇を滅するのである。「無量の菩薩を教へ」は即ち大勢の人達を教ゆるので、此處では菩薩といふのは人を指して居る、佛教では總ての人に佛性がある、それが少しでも眼醒めたら直ぐそれが菩薩になるのであるから、一切の人を指して菩薩と言つて居る。日蓮聖人は「菩薩とは日本國の人々なり」とこの經文を解釋された位で、少なくとも日本人は皆菩薩に仕上げなければならぬから、「菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしむ」——最初はいろ〳〵と說き去り說き來るけれども、その究極する所に於ては一乘の教に安住せしむるのが上行菩薩の目的である。「一乘」といふは意味が深いのであるが、佛教の內部で言へば、方便の教も眞實の教も皆開顯統一して渾然たる統一的の一佛教にするのが一乘の教といふ、佛教を部分的に見て、阿彌陀經とか地藏經とかいふやうな枝葉の所に引つ懸つ

て、佛教の眞意義に徹底しないのを非一乘の教といふのである、故に一乘とは開顯統一といふことを意味するのである。それは佛教の內部で見たのであるが、玆にいふ一乘は佛教の內部だけでなくして、更に世法即佛法といふか、一般の文明と佛教の理想とを併せて開顯統一するといふのである。日蓮の所謂「天晴れぬれば地明かなり、法華を讀る者は世法を得べきか」といふが如きであつて、世間の道德政治—今の言葉でいへば人間の實生活の全部とこの法華經の信仰とが調和して、渾然たる理想的の生活となるのである、それを信仰の生活と名づけても信仰だけではないので、信仰を中心にしたる人類の實生活である、それが「一乘の教」である。上行菩薩の目的はさういふやうに法華經の偉大なる理想と信仰とを基礎にして、道德なり政治なり、實際生活なり、人類の文明を造り出して行く、そこに目的を置くのであるから、總ての人が法華經を中心にしたる理想的の文明に進んで行くやうに導くものが、この上行菩薩の活動であると、釋尊が賞讃をせられたのであります。

それ故に自ら上行を以て任じて居る日蓮は、造次にもこの經文を忘れることは出來ない、さうしてその目的から離れることは出來ないから、日蓮聖人の「畢竟して一乘に住せしむる」といふ觀念は非常に强く現はれて、現に「立正安國論」の最後の決心を言ひ現す時には、「信仰の寸心を改めて實乘の一善に歸せよ」と言つて居る、實乘といふも一乘といふも同じ事である、殊に一善といふことを書いて居るのは、今申す渾然として法華經の理想から見たる完全な文明をいふのである、それを正しきを立てると

いふ事に說明をした。或は『如說修行鈔』に於て自分の奮鬪して居ることを說いて、「諸乘一佛乘に歸して」と言つて居る、いろ〳〵の分裂して居る宗教なり學問なりが、法華經の大精神に調和を保つやうになつて、始めて吹く風枝を鳴らさゞる理想の文明が實現されるといふ事を言つて居る。それであるから神力品に衆生の闇を滅するといふ個人的の利益、煩惱罪惡を個人的に除く事は、それが總體としては一乘の教に來るのであり、皆が菩薩精神を現して社會奉仕の活動、或は國家に對する愛國的の行動、人類に對する博愛の行動として現れて行くのである、さうしてそれが又今のやうに社會と國家と人類といふことが衝突的の有樣に分れるといふことは、文明が偏倚つてゐるのである、各々範圍は違つても國家を無視したる人類の社會といふものは今日に於ては成立つまい、又人類を無視したる國家は成立つまい、社會を忘れての國家、國家を忘れての社會といふものは存しないといふことであるならば、そんな言葉は假りに附けて居るのであつて、ズッと一貫して理想の文明に進み行くことが出來る譯であるから、即ち一乘の教に來らしめて行くことが、今日の小別した言葉でいへば社會奉仕とか、愛國的觀念とか、博愛の行動とかいふことになるのである。併しそんな切れ〳〵な言葉は要らないから、個人の闇を除いてさうして理想の文明を造り成す力になると言へば、そこに上行菩薩が我等に與へて與れる御利益が示されて居ると思ふのであります。この菩薩が活動したら斯ういふ結果が現れて來ると言つた、その結果は即ち利益を示して居るものであります。

四八、分別功德品　其れ衆生有つて佛

の壽命の長遠なること是の如くなるを聞いて乃至能く一念の信解を生ぜば、所得の功德限量あること無けん、若し善男子善女人有つて阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十萬億那由佗劫に於て五波羅密を行ぜん、檀波羅密、尸羅波羅密、羼提波羅密、毘梨耶波羅密、禪波羅密なり、般若波羅密をば除く、是の功德を以て前きの功德に比するに、百分千分百千萬億分にして其の一にも及ばず、乃至算數壁諭も知ること能はざる所なり、若し善男子是の如き功德あつて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退すといはゞ、是の處りあること無けん。

この『分別功德品』は殊に信仰の功德を說明したのでありますが、これが本になつていろ〳〵の德行が起るので、即ち「信はこれ道の元功德の母」と華嚴經に說いてある如くに、一切の道德行爲は信仰を本にして發動して來るのである。儒敎で言へば一つの誠を本にして一切の德行が導かれるといふので、その一つの誠といふが佛敎の方では一つの信仰といふことになるのであるから、一番大事なのはやはり信仰である。此處には「一念信解」といふ簡單な信仰を說いて、それから廣大な功德があるといふことを說明して居るので、衆生有つて前に說いた壽量品の本佛の顯本を聞いて——その壽命が長いと言つても唯だ長いといふことではない、如來の廣大なる活動、慈悲もあり、功德もあり、救濟の力もある、佛を渴仰する意味合が玆に「壽命」といふ言葉で言ひ現はされて居る。丁度敎育勅語に「我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠」と言はれたその宏遠といふのは、何も唯だ古いといふ事だけではない、そこに建國の偉大なる意味合を現はして居るのである。この「壽命の長遠」といふ事も本佛の偉大なる事を現はすので、恰かも「天壤無窮」といふ言葉が、長く續くといふだけでなくして、そこに我國の發展の意味が十分に示されて居るが如く、佛の常住といふことは種々なる救ひの働きをなさつて、功德の廣大なることが自らそこに包まれて居るのである。さういふ風に佛の壽命の長遠にして偉大なる活動と功德があつて、吾等はその救ひに繫つて居るものぢやといふ意味合ひを了解して、そこに一念の信解を生じたならば、——「一念」とは「一と念ひ」といふことで、極く簡單な事をいふのである、「信解」はその意味合を柔順に受けて、「さういふ事であるか」といふ風に心を從へて行くことで、この場合には「解」の字は餘り力を入れる必要は無いのである。これは經文の後の所に「略解言趣」といつて、この經文の意味合を解する場合の功德が說いてある、その方に「解」の字は附くのであつて、玆は「一念信」と見て宜いと日蓮聖人も解釋されて居る。その簡單な一念信の功德は、限りなき廣大なるものであつて、比例を取つて見るならば　菩提を得るが爲めに八十萬億那由佗劫といふ非常な長い間五波羅密の行を積む、即ち般若波羅密を除いて他の五つの波羅密行を積んだ場合には、その功德は廣大なものであるけれども、今の一念信に比較したならば迚も及ばぬものである、百分千分乃至億萬分の一にも及ばぬものである、算盤

にも譬喩にも及ばぬ程本佛を渇仰する所の一念の信仰は廣大なる功德のものである。これは唯だ信仰を奬勵する爲に假設的に斯樣な事をいふのではない、菩薩行として或は布施、持戒、忍辱、精進、禪定といふやうな廣大な行を積んでも、それが億萬分の一にも及ばぬといふは非常な意味のある事である。比例を我が國民道德に取れば直ぐ分るが、どれ程社會事業に寄附をしやうとも、或は個人的の道德を守らうとも、人から辱めを受けた場合に勘忍が強からうとも、或は商賣に勉强しやうとも、又精神統一とか旗式呼吸といふやうな事の大先生になつたからと言つても、忠君の觀念がなかつたならば、そんなものは一切駄目ぢや。社會の慈善事業として拾錢の金を寄附することが出來なくても、即ち布施が出來なくても、天皇に對して至誠忠節の觀念を有つならば、その一つが最も勝れると言ひ得られるのである。家庭に於てもやはり同じ事で、いろ〳〵の事を能くしたからと言つても、親不孝が一つあつたならば、他の善行は認められぬと同じ事で、今宇宙的に宗教の信仰を說明して居る場合に、佛教徒として法華經を信じ、法華經の敎義の中心にある所の本佛に對する信念が無かつたとしたならば、餘の菩薩行は駄目だといふことを說くのである、唯だ信心を奬勵する爲めに假りに斯ういふ比較を設けるのではない、斯く說く事が敎の眞意である。丁度今申した國民道德の話は、さう言つて忠義の心を奬勵するといふ譯ではない、事實國民道德としては、忠節がどんな德行にも秀でて居る譯なんである。

さういふ風に今佛が自ら說明するにも拘らず、尙ほ菩提の道に於て退轉を生ずるといふことがあつたならば、それは洵に譯の分らぬ人といふべきである、壽量品に於て本佛の顯本をし、分別功德品に於て一念信を斯く奬勵した以上は、我が敎に隨つて居る限りに於ては、この壽量品を中心として、醇乎たる本佛に對する信念を取つて、安心立命するは當り前のことである、それがさう出來ないといふことは實に譯の分らぬ馬鹿漢だといふ事を、此所に「退すといはゞ是の處り有ること無けん」と釋尊が仰せられたのであります。

四九、藥王品　此の經は能く一切衆生を救ふものなり、此の經は能く一切衆生をして諸の苦惱を離れしめたまふ、此の經は能く大に一切衆生を饒益して其の願を充滿せしむること、清涼の池の能く一切の諸の渴乏の者を滿すが如く、寒き者の火を得たるが如く、裸なる者の衣を得たるが如く、商人の主を得たるが如く、子の母を得たるが如く、渡りに船を得たるが如く、病に醫を得たるが如く、暗に燈を得たるが如く、貧きに寶を得たるが如く、民の王を得たるが如く、賈客の海を得たるが如く、炬の暗を除くが如く、此の法華經も亦復是の如し、能く衆生をして一切の苦、一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしめたまふ。又云く此の經は則ち此れ閻浮提の人の病の良藥なり、

若し人病あらんに此の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならむ。

これは又廣く法華經の利益を說明したので、前の『分別功德品』は一念信に於て中心を說明した、この『藥王品』はあらゆる功德利益が法華經に依つて得られることを說いたのてある。即ち「此の經は能く一切衆生を救ふもの」て、さうしてその救ひは廣い意味てあつて、「諸の苦惱を離れしむる」のてある、即ち人生に於ける樣ゝなる苦みを離るる力がある、病氣一つを癒すといふやうな譯のものてはない、精神的にも物質的にも人生生活を襲ふ所の凡百の苦悶を悉く打開いて行く力がある。それ故にこの法華經は「大いに一切衆生を饒益して」――「饒」その者は「にぎはす」といふ事てあるから、貧しき者に實を與へ、飢えたる者に食を與へるが如きことが「饒」の字の義理てある、その者を恤はし、足らざるを足してその願ひを充滿せしむるのてある。それは恰かも清涼の池が、渴えて居る者を滿すが如く、その池の側に行けば、非常に渴して居る者が皆清い水を得て滿足するが如きてある。印度は殊に暑くて咽喉の渴くことが多かつたものてあるから、信仰に就て「渴仰」といふ言葉が盛んに使はれて居る、渴して水を需むる時の精神ぐらゐ强いものは無い譯なのてありませう、軍人などが戰場に於て渴した時には、泥水ても何ても「死んても構はぬ」と言つて飲むさうてありますが、さういふ風に非常な苦みに居る所の者が救はれることを「清涼の池の能く一切の諸の渴乏の者を滿すが如く」と說いたのてある。又之を小さく申せば、寒き者が火を得たるが如く、裸の者が着物を得たるが如く、商人が主人を得たるが如く、子供が母を得たるが如く、渡りに船を得たるが如く、病に醫者を得たるが如く、暗に燈を得たるが如く、民の王を得たるが如く、貿易商の海を得たるが如く、炬の光が暗を除くが如く、この法華經も「能く衆生をして一切の苦一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしめたまふ」のてある。これには皆「一切」といふ字が附いて居る、決して一つをいふのてはない、この一切の苦といふ中に、處と品とは違つても皆その人々の精神を襲うて居る苦みが含まれて居る、或は子供を失つて苦しむ者もあり、名譽を失つて苦しむ者もあり、求むる者を得ずして苦しむ者もある、樣々なるものてあるが、併しその事柄が精神を襲うて居る時には、それが一番强く現はれる、側から見たら左程てない事ても、本人に取つてはそれが一番ひどい苦みなりと思ふ、それを法華經は除く力を有つて居るのてある。さうしてこの譬は何れも道德的、精神的なる事てあつて、貧きに實を得るといふことも物質的に言うのてはない、德の上に於て貧しい者が人格が整う人となり、暗に燈といふのも精神が暗黑に迷うて、どつちへ行つて宜いのか方向が分らなくなつて居る時に、信仰の光によつて進むべき道が開かれて來る、民が王を失つて露西亞の混亂の狀態になつて居る所に、賢明なる王が出て安寧秩序を與へるが如く、精神がちやんと秩序立つて恢復されて來る、是等の譬は含蓄的な言葉で說いてあるのてあるから、何に當てなければならぬといふことはない、何事にても當て嵌めて宜い程に、あらゆる宗教的要求、人生生活の要求が全部法華經に依つて滿されることを示す爲に、この商人の海を得たとか、渡りに船を得たといふ言葉を以て說かれたの

てある、これは法華經のあらゆる方面の利益を說明して居るのであります。

尙ほこの『藥王品』には「此の經は則ち登れ閻浮提の人の病の良藥なり」といふことがある、この病といふ事も身體の病と精神の病と兩方を含んでいうて居るので、どつちが重いかと言へば精神の病である、けれども肉體の病も法華經に依つて癒すのである、けれどもどちらが目標かと言へば、斯ういふ時の病といふ言葉は精神的の事である、その病氣に罹つて居る者、心は勿論身に於ても病氣があるならば、この法華經を聽いて信仰をしさへすれば、その病は無くなり、さうして不老不死の身となることが出來ると說かれて居る。この「病即ち消滅して」といふのは、現在の生活をいふのて「不老不死」は死後の生活をいふのてある。この言葉は羅什譯の法華經には斯ういふやうになつて居るが、法護譯の「正法華經」には、前の方は現在の事て而して後ち死後に於て不老不死の益を得るといふやうに經文がハッキリなつて居る。それ故に「病即ち消滅して」は肉體の事もあるけれども、大體は前に申した精神的の苦悶を打消し、罪惡を打消して、洵に幸福なる生活をするといふ事てある、現在には宗教の法悅の生活に入り、死後には不滅の如來と成るといふが「病即消滅、不老不死」の眞實の義理てある。所が今日一般には之を引下げて、病氣にも罹らず天死もせぬ——不老不死と言つても少しは年を老るけれども、年老つた中にも元氣があるとか、死なぬといふ譯てはなけれども、マア八十以上になつて死ぬとかいふやうに、極く曖昧な意味に解釋して、この經文を濫用して居る者が多いのてあるけれども、釋尊の眞意は法華經に依れば如何なる者でも必ず精神の苦悶と人格の缺點とを除いて、その苦悶の病、罪惡の病は必ず消ゆる、さうして何者と雖も不老不死の佛果を得るといふ事を正確に說いたのてあつて、今の曖昧な意味に於て不老不死を說明して居るやうなことは、法華經の精神には適はぬのてある。今私がいふ如くてあれば、この經文は少しも割引せずしてハッキリ力强く說明することが出來る、之を現在だけの事として見やうと思ふから、不老不死といふ事でも「死なんのてはないが若死はせん」とか「年を老らんのぢやないが齒が拔けない」とか言つて誤魔化したやうな事を言はなければならぬのてあるが、經文の眞意はさういふことてはない、最初に私の說明する通りてある。

五〇、祈禱鈔　大地はささばはづるるとも、虛空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬ事はありとも、日は西より出づるとも、法華經の行者の祈のかなはぬ事はあるべからず、法華經の行者を諸の菩薩人天八部等、二聖二天十羅刹等、千に一も來つてまほり給はぬこと侍らば、上は釋迦諸佛をあなづり奉り、下は九界をたぼらかす失あらん、行者は必ず不實なりとも智慧はをろかなりとも、身は不淨なりとも戒德は備へずとも、南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給ふべし、袋きたなしとて金を捨る事なかれ、伊蘭をにくまば栴檀あるべからず、谷の池を不淨なりと嫌

はば蓮を取るべからず、行者を嫌ひ給はば誓を破り給ひなん、正像既に過ぎぬれば持戒は市の中の虎の如し、智者は麟角よりも希ならん、月を待つまては燈を憑むべし、寶珠のなき處には金銀も寶なり、白鳥の恩をば黒烏に報ずべし、聖僧の恩をば凡僧に報ずべし、とくとく利生をさづけ給へと強盛に申すならば、いかてか祈のかなはざるべき。（遺文錄九〇六）

これは日蓮聖人の遺文でありますが、有名な文で、法華行者の祈は必ず適ふといふ事を力強く言ひ現はして居るのであります。大地を指して外るゝことがあつても、虛空を繫くことが出來ても、潮の滿ち干せんやうなことがあつても、或は日が西から出るやうなことがあつても――これは何れも事實無い事を擧げて、併しそんな事が假りにあるとしても、法華經の行者が祈つて、その祈の感應を受けんといふことはない、若も法華經の行者が誠意を籠めて祈るのに、菩薩及び諸天善神がお守りなさらんことがあつたならば、それは上釋尊に對して「法華の行者を必ず守ります」と誓ひを立てたその誓ひに背くことになり、下は九界の者に對して「守つてやらう」と仰しやつた言葉が反古になる譯であるから、諸天善神は必ずお守りになるに相違ない。「行者は必ず不實なりとも智慧は愚かなりとも」といふのは、この法華經を修行するには必ず道德が完備して、立派な人に成つてからといふ譯ではない、德は備はらすとも智慧はなくとも、自分の身は不淨であり、戒德は備へなくとも南無妙法蓮華經と申せば必ずお守り下される譯である。これは德が要らぬとか、智慧が要らぬといふことではない、如何に自分が人格の完成を望んで居つても、智慧を磨かうとして居つても、それは絕對の批判から見たならば、何れも智慧も愚か、德も足らぬといふことになるのであるから、斯ういふ場合には左樣な反省的の言葉を用ゆるのは通常のことで、斯う言つたから「日蓮は智慧を求め德を求めて居る者ではない、惡人であらうが愚者であらうか構はぬと言つて居るぢやないか」といふ風にこの文章を應用するならば、それは洵に曲解といふものである。さういふ事の爲めに種々の誤解が起るのは畢竟無學の致す所である、文章といふものは斯ういふ場合には、假令自分の德は足らんても、誠を以て信じて居るならば、その信仰の中に必ず御守護を受けるといふ意味であることは疑ひの無い事である。それは丈の譬が洵に能く判かるので「袋きたなしとて金を捨る事なかれ」――袋が穢ないからと言つても、中に小判が入つて居れば、それは大切にせんければならんぢやないか、その如くに行者は戒德は備へなくとも、智慧は愚かなれども、醇乎たる信仰の黃金を有つて居る者であれば、その信仰の黃金を有つて居る法華行者をお守りにならんければならん譯である。「伊蘭をにくまば栴檀あゝべからず」――總てが淨くなるといふことは望むべからざることである、吾々凡夫の生活には一面に穢れがあるとも、信仰に依つて正しきを履まうとして居る信仰の栴檀の香ひがあるならば、伊蘭の煩惱は臭くとも、その伊蘭の在る所に栴檀が生へるのである。「谷の池を不淨

なりと嫌はゞ蓮を取るべからず」――泥の中から蓮が生へるので、餘りにこの人間が總べて嚴格にのみしてしまふ時には、何にも無くなつてしまふ。能く禪學などをやつて煩惱を全滅しやうとする人が、子供の爲めに迷うからと言つてその愛著を斷ち切つた時、今度は親が死んでも別に悲しくもない、國が亡びても憂るに足らぬといふ氣拔けしたやうな人間になつてしまふ。煩惱とは言つても人間の生活は、人間の感情を悉く全滅せんならぬことは無いのである。やはり池に泥があつても宜い、その中に蓮の花を咲かせんければならぬ、泥を掻出してしまつて石塊ばかりにしやうといふのではない、人間の理想は其處にあるから、谷の池の泥を嫌つたならば蓮は取れない、吾々凡夫の生活の中には多少の迷ひがあり濁りがあつても、信仰に依つて之を導くならば、その者を守らんければならぬ。それをば「彼の行者には缺點がある」といふやうなことでお守りにならぬといふならば、それは法華行者を守いといふ佛前の誓ひを諸天善神がお破りになる譯である。殊に正像二千年の時代が終つて、末法の今日となつては、持戒と言つて嚴格に戒律のみを守つて行かうとする者は、傳教大師が既に之を市の中の虎の如しと言つて居る、繁華な町の中には虎は棲んで居らぬやうに、今日さういふ嚴格な戒律を目標にしては人は得られない。「智者は麟角よりも希ならん」――眞の賢い者は麒麟の角が得難い如く、容易に在るものではない、けれどもその敎に繫がつて比較的善き者は之を大切にせんければならぬ。月が出る迄は燈火を憑まなければならぬ、寶珠の無い所に於ては金銀も寶である、白烏の恩をば黑烏に報ずる場合もあるといふが如くに、末法の世に完全無缺の聖僧を求めた所が得られんから、古來の立派な方々の恩をば今日の敎を傳へる者に報じて行かなければならぬ。玆にいふ「聖僧」とは釋迦如來或は天台傳敎等の事を日蓮聖人が言つたものであらうと思ふ、「凡僧」とは自分自らを指して居るのである。今日の如き譯の判らん、敎にも背き精神も腐つた坊主をいふのではない。これも亦濫用して、詰らぬ坊主が「日蓮聖人は聖僧の恩を凡僧に報ずべしと言つた、吾々は凡僧である」と言つて凡僧露出してやつて居る者があるけれども、さういふ事も亦非常な曲解である、凡僧と言つても日蓮聖人を手本にして行かなければならぬので、日蓮自ら凡僧と名乘られて居る譯であるから、能ふ限り學を修め德を積んで信仰を磨いて行くべきが論の無い話である。併し此處では信仰の上から利益を見て居るのであるから、斯ういふ言葉がある譯である。それ故に法華の行者が誠心を籠めて祈願をする時分には「いかでか祈のかなはざるべき」で、祈のかなはん事はないと仰せられた。けれどもそれならば病氣を祈つたら病氣が癒るかといふと、さうはいかん事がある、それは此方の願ひが必ず正しいとは言へない、自分に取つては正しいと思うても、私の心が籠つて無理な願ひをすることもあるのであるから、これは法力の方から見て利益があると斷言したものである。併しながら行者の心得としては祈つて利益が無くても、それが爲めに狼狽へてはいかんから、次の『開目鈔』に於ては丁度これと反對の言ひ現はし方をして居られる、これは『開目鈔』の方が一段進んだ信仰であると思ひます。

一五一、開目鈔　一代經經の中には此經

計り一念三千の王をいだけり、餘經の理は王ににたる黄石なり、砂をしぼるに油なし、石女に子のなきが如し、諸經は智者猶ほ佛にならず、此經は愚人も佛因を種べし、不求解脱解脱自至等と云云、我れ竝びに我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば自然に佛界にいたるべし、天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穩ならざる事をなげかざれと、我弟子に朝夕教へしかども、疑ををこして皆すてけん、つたなき者のならひは約束せし事をまことのときはわするゝなるべし、妻子を不便とをもうゆへ、現身にわかれんことをなげくらん、多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか、佛道のためにはなれしか、いつも同じわかれなるべし、我れ法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて返つてみちびけかし。（遺文錄八一九）

即ち『開目鈔』の方は何處までも正義を踐んで行くので、利益といふやうな形に現はれたものから判斷をしない、尙ほ永遠の成佛を認めて進んで行くことを教へて居られる。「一代經經の中には此の經ばかり一念三千の玉をいだけり」て、法華經に正しい眞理が現はれて居る、他のお經の眞理は玉のやうに見えるけれども、實は黄石であつて本當の玉でない、それは「砂を搾るに油無し」て、菜種ならば搾つて油が出て來るけれども、砂を幾ら搾つても油は出ない。又「石女に子無し」と言つて、俗には不產女といふやうな事を言つて居るが、今日で言へば生理的缺陷があるといふか、さういふ女には子が生れない。この譬喩は涅槃經に釋尊が說かれて居るのを玆に用ひたのであるが、一切衆生に佛性ありといふ事をハツキリ說明して來ないと、佛性無しにその者を救ふといふのは、恰かも砂を搾つて油が出て來る、石女が子を產むといふやうな話になつて來るので、第一は佛性論を確立しなければならん。所が「諸經は智者猶ほ佛に成らず」て、この佛性の根本を明らかにする點に於て缺けて居る、法華經は愚な者ても佛因を種るといふのは、眞にこの佛性の教が明らかになつて居る、女人が助かるとか助からぬとか、惡人がどうぢやといふやうな問題は、この佛性論を明らかにせんからである、女人と雖も惡人と雖も皆同じ佛性を有つて居るといふ根本から法華經は說いて參つた。「解脱を求めずして解脱自ら至る」――これは涅槃經の經文でありますが、眞に佛性から說明をして來ると、解說の佛を得やう〳〵と言はないても、自然に佛の果報が出て來る。それは自分に有つて居る所の德を現はして來るのであるから、この言葉は丁度「行ひ易く守り易し」と軍人への勅諭にあるやうなもので、自己の明德を明らかにして行くならば、忠孝は難かしくない。佛性の方から明らかにして行けば、吾々が向上心を辿つて佛に成ることはさう難かしい譯のものではない、己れの持つて居る球が光を放つて行くやうな譯だといふ事を涅槃經に說いてある、この意味を受けて日蓮聖人が言はれるには「我れ竝びに我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば」――今

度日蓮は佐渡に流され、又弟子は土の牢に入れられたりした爲めに、今迄の弟子信者にも狼狽へた者が段々あるけれども、さういふ者は駄目ぢや、「現在に法華經を信じた者は幸福な生活を營むと言つて居つた、それが流されたり土の牢に入れられたりするやうな事のあるべきものではない、然るに日蓮聖人はじめ流し者にお逢ひになるやうな事では、法華の信仰をした所が駄目ぢや」といふやうなことで、正法正義の觀念を失つて唯だ目前の形の上から利益を見て居るやうな者は駄目である。併し日蓮が斯くならうとも疑ひを懷かないで信仰を貫く者は、自然に佛樣に成ることが出來る。天の加護なき事を疑はざれ」――天は正義に與し給ふべきであるけれども、どういふ事情に依つて正義の者が不利に陷るか判らぬ、凡夫の考へからすればどうも是は天の護りが無いやうに見られると言つて心配するかも知らんけれども、そんな事に依つて精神を動かす必要はない、正義を履んで周章狼狽してはならぬ。前の『新藤鈔』に新れば必ず利益があると言つた言葉と、この天の加護なき事を疑はざれといふ言葉と、どちらが高いかといふと、この『開目鈔』の方が餘程信仰が深く入つて居るのである。天台大師も完全な信仰は「終日慮なけれども終日悔ひ無し」と言つて、一日新つてそこに感應利益が目前に見えんからと言つて、その一日の新が無駄であつたとは思はない、目前に自分が形に於て利益を受けなくとも、正義を以て進んで行くに一點疑ひを懷かぬといふ事が信仰の極致であると天台が言つて居る。日蓮聖人はやはり其處を仰しやるのである、「現世の安穩ならざる事をなげかざれ」――目前の生活が物質的に幸福でなからうとも、そんな事に疑ひを懷くなと我が弟子に何時でも敎へて置いた、天の護りがなからうとも目前の生活が苦痛であらうとも、そんな事に依つて正義を捨てるナといふ事を朝夕敎へたけれども、「疑を起して皆すてけん」――で、日蓮が龍の口の頸の座に坐り、殊に佐渡に流され、或は弟子檀越が土の牢に入れられるやうな迫害の重なるにつけて、疑ひを起して捨てた者があらう、それは拙い者である、拙い者は約束をした事を愈〻この時に於て忘れるものである。必ずや正法には反對も起り迫害もある、天定まり平和に行く時には、正しき行ひの者に幸福が來て、邪を行ふ者が罰せらるべきであるけれども、何時もさうはいかん、邪人勢力を得て却つて正法の行者を迫害する時があるから、そんな事に依つて疑ひを起すなといふ事を常に言うて居つた。然るに實際迫害が日蓮の身に來た時、疑ひを起して捨てるやうな者は、如何にも拙き者共である、この「つたなき者のならひは約束せし事をまことのときはわするゝなるべし」といふが如きは、大和魂を最もよく言ひ現はして居る言葉であらうと思ふ。又モウ一つは妻子を不便と思ふ感情である、而もその觀念は愈〻自分が生命に及ぶといふ問題の時には、必ず妻子の不便といふことに考へ及ぶものである。それは「現身にわかれん事をなげくらん」で、愈〻命がなくなる時、病に罹つて死ぬ時、年老つて死ねといふやうな時ならば、別れともないが仕方が無いといふので、嫌〻ながら別れるのだらうけれども、現身に別れるといふのは自ら覺悟して敎の爲めなり國の爲めなり、犧牲獻身の精神に依つて生きながら訣別して妻子と別れて、或は戰場に或は法難に赴かうといふことになると、

それは中々出來ない。丁度淺野内匠頭の家等が、赤穗に於ては三百餘人が忠義の志を立て貫かうと言つたけれども、その心を試驗する爲めに大石内藏助が、迚も目的は達せられまいから寧ろ城を枕に切腹しやう、それに志を同うする者は集まれと言つた時には非常に數が減つて、幾十人しか殘らなかつたといふが如きもので、愈々生きながら身を犧牲にしやうといふ時には、そこに惑ひが起つて來る、それは妻子の情に引かれるからであるけれども、併しそこを考へなければならぬ。「多生嘖切にしたしみし妻子」――幾度も〳〵生れかはりした長い間には、何時も妻子があつたであらうが、その幾百萬遍の妻子と別れる時にどうしたのであるか、何時も同じやうに「あゝ別れとうもない」と流の涙であつたけれども、遂に壽命が盡きて別れたものである。「いつも同じわかれなるべし」で、武士道の爲めに殉ずるとか、殉教の高潔なる精神に依つて別れたものではあるまい、何時も同じやうに泣の涙で淘に見つともない別れのみをしたのであらうが、それは何邊繰り返しても同じ事ではないか、今度こそは一つ清い法華經の御爲めに身を捧げる人となる決心を持つたならば、それは訣別は辛いけれども、その辛い犧牲のそこに偉大なる功德を積んで行くのだから、「我れ法華經の信心をやぶらずして霊山にまいりて返つてみちびけかし」――その正しき信仰を貫き得て、自分は霊山淨土に佛樣になつて、今度離つて娑婆に殘した妻や子供を救はうといふ事に考へたならば宜いてはないか。これは御利益といつても「加護なき事を疑はざれ」といふ程の高潔なる所に達して、さうして正義と信仰を貫いて行くのでありますが、この正義の信仰の貫ける所が即ち御利益であるのであります。之を「信心不退の利益」と言ふのであつて、「法華經の信心をやぶらずして」といふ事が一番大きな利益であります。

自然國家と不自然國家

海軍中將　宮岡直記

先程も話が出たのであるが、此地方では昨今の經濟上の變動と思想の問題との關係に就ては如何に見るか知らないが、獨り經濟界ばかりでなく、破れて行く總ての問題は其根本に不自然のものが有つて、それが總てのものに及ぶ結果に外ならない、物の成立には自然のものと不自然のものとがある、現在は思想經濟すべてが不自然に傾くが故に大變動が來るのである、然し乍ら私は此自然、不自然の問題は國家を根本として考へて見るのが最も大切であると思ふ、そこで私は如何なる國が自然であつて又如何なる國が不自然であるか、それをロシヤの例に依て考へて見たいと思ふ。

申す迄もなきことであるが、近頃日本では目前のことばかりに極端に走つて慎重なる思慮を缺いて居る、一個の家庭でもそれは祖先に淵り子孫に流るゝ關係があり、自分は村の一員であり、村は國と云ふ樣に續がつて行く、元來動物は單獨で行けるものではない、勿論人間は一人で生活して行くことは出來ない、必ずそこに一つの塊が出來て、集團と云ふか、夫れが段々重り合つて大きくなつて行くのである、

其一番根本の自然の團結は何であるか、夫れは父母兄弟子孫である、夫れが一つの塊りとなり、擴がつて氏族、部落、國家となることは、古今東西規を一にすることで、動すことが出來ない、父母を同ふするものが家族となり、祖先を同ふするものが部落となり、大先祖を同ふするものが統治政治と云ふものにまとまりを付けられて主權を爲し、玆に國家を構成する、國を泝つて其自然の單位を求むれば亦人間の自然の單位に歸することは理窟ではない、爭ふべからざる事實である、而して家族の頭は人が作つたものでなくして父が頭であり、國は氏族の祖先が天賦の頭である、家庭の自然の頭は父であり、國は民族の最も遠きものが即ち夫れである、此點より考ふれば父母を敬愛し、其暖みが其父母、又其父母と泝り、又子孫に下りつゝ、相融合して國を爲すのであつて、これが自然の國家と云ふものである、我國は正に夫れであつて、同一祖先の上に立國の大本定り、之れに依つて御國體の精華と云ふか、君民義父子の語があるのである、故に君父同源の素質を持てる我國は、個々一人を單位として冷かなる法律の規定に依つて結ばれたる西洋諸國とは大に其趣を異にし、家族の組織が相互に結び合はされて暖き國家が成立つた者であることは明である、諸君はどうであるか、現在は一般に權利義務の說が甚だ盛て、國家と云ふものに就ても國家とは如何、曰く國家とは主權、及土地人民より成る、と言つて居るが、それは西洋の法律上より見て國と云ふものは一般的の定義を作つたものであつて、學校の子供でも自分の國のことは捨てゝ置いて只主權土地人民だと云ふが、學問上からは或はそうだろうけれ共、それは又一つには日本を除いた今の世界の五十一ヶ國であると見なければならない、元來國の起りを考へて見ると其初は皆一家族から成立つて居るのであるけれ共、西洋に於ては古代から中世に於て移動が多く、東民西走北民南移の

狀態であつて、國家と云ふものに發達しない以前には、若子の日本の薩摩とか長州とか云ふ樣な小さなものは有つたけれ共、互に異人種入交つて雜然として統一がつかなくなつたのである、そこで豪傑が出て夫等を征服し、或は人々相互に權利を保護する爲に法律を作り、國家と云ふものに纏つたのであるけれ共、其根本を見れば又家族の組織の有つたことは歷史上明なる事實である、故に必ずしも先祖のことを云ふのは古い、野蠻であると言ふことは出來ない、我が日本の昔を考ふれば自然に情の暖さを感じ、それが暖みを有する國家となり、國家には法律が必要であり、權利義務の制を定めたのであると云ふことが解る、然るに今や其暖味は消へて、爭鬪混亂の時代に變つて來た、夫れは權利義務の觀念が輸入されて來た上に、あらゆる學問が競つて之れに油をかける結果に外ならない、私は此時に當つて大いに自然の問題を考へる必要があると思ふのである。

ロシヤは日露戰爭以前迄はとても日本なぞは相手になれぬ國であると思はれて居た、人口は一億七八千萬もあり、擴りは八百幾十萬方里に亙つて居る、恐るべき國であるとして人類全體から神の如く恐れられて居たものが、一日か二日の內にあゝゆう最後を遂げたは何であるか、其根底に於て不自然なるものがあり、不自然に成立つて居た結果であると云ふことが出來る、不自然に成立して不自然に終る、之れ當然のことであるが、日本とロシヤとは共に極端になる性質を持つて居るのであるから、大に戒心を要するのである、地方は知らず、東京に於ては學生其他あらゆる方面に共產主義、又夫れに類似する書物が版を重ねて賣れて行くのであるが、其クロポトキンの如き極端なるものが不自然に成立てるロシヤに出て來たのである、元來ロシアはギリシヤの東のアセニヤ人から出來たものであつて、最初に起つた豪傑をルーリツクと言ふ、つまりスエーデンの方から好

い王様を連れて來たのがルーリックである、それが九世紀に起つたのであるが、恰も我が神武天皇の樣なものである、それが先祖で、イバン其他の豪傑が色々起つたが、大名の地定つて發展したのがロシアであつて、外國の豪傑を雇つて來て帝王と仰いだ事は甚だ不自然であると云はねばならない、ドン河、ドニツプル河に添ふて南より北へ千里一畔、山もなければ谷も無い、カルパチヤ山脈、コーカス山脈、ウラル山脈を以て三方を境し、北は北海に臨む、其眞中に起つた人種は日本あたりの小い中に起つたものとは異ふ、限りなき大洋にうねりを成す所の國である、であるから國民は皆冒險的性質を具へ、諺にロシア人は年中旅の中にある、と云ふが、際限なき土地を只先へ先へと進んで滿足する事を知らないのである、故にロシアの發展は分散的の膨脹であると云へる、行き當る迄は何所迄も行くと云ふ風である、然し夫れも自然には勝てず、北は北海、南は黑海、東は西伯利に擴り、三十年來太平洋を限りとして擴る丈は擴がつて、さて行き當つて了つた、地形はそうであるが、さて氣候はどうかと云ふに、北は北洋限なき雪の世界であり、平原只徒に大うねりのみであつて森も無ければ林もなく、沙漠の如く殺風景であつて、無趣味な上に寒いのである、南は地理上日本と同一緯度であつても、夏は熱帶の如く、冬は北洋の如くである、浦鹽方面は霧の深い事は日露の時に實見したものであるが、南方も亦同樣である、天の時と地の利が合して人の和が生ずるのであるが、極めて悲觀に陷り、極めて深刻になり易いのは氣候から來るのである、故にロシアは政治、哲學、宗教等皆天の時地の利に攻められて、極端に走る、さて天の時地の利が人に及ぼし、思想に及ぼすのは大體か樣であるが、ロシアの歷史を見るに、諸君も御承知であらうが、少しく評を加ふれば彼等は人類と云ふよりもむしろ獸類と云ふのが適切である、成る程ペートル大帝はロシアを發展せしめたる點より見れば確に偉人であらうけれ共、彼の歷史を他面より見るならば實に言語に絶するものがある、自分の實の妹のソフイヤを牢獄に投じあらゆる慘酷の所行を爲し、又二人の妻を有し、前の妻ドケヤを虐待し、皇太子アレキシスを牢の中に入れて遂に之れを殺して了つた、斯の如して親を同ふする妹を虐待し妻を攻め血を分けたる皇太子を殺す、此殘忍なる人間が又當年ロシアの大偉人である、此暴虐は又政治方面にも然るべく想像する事が出來るのであるが、一面ロシア發展の大偉人は又一面人道上許すべからざる大惡人である、然のみならずペートル以後各一代毎に血族相爭ふて中興の女王と云はれるカタリナ二世に及んだが、然し乍ら此女王も亦夫のペートル三世を殘害し、自分の子のポールをも虐待した、かゝる所より云へばロシア國民として最大の敬意を表すべき皇室はペートル以來カタリナ迄六代の間、吾々日本人の目より見れば實に話にならぬことのみである、「君をなみし親をなみす何ぞ禽獸と擇ばん」とあるが、彼等にして禽獸と擇ぶなきは、皆其根底の不自然なるに依るのである、ロシアはペートル以來カタリナ迄六代百年の間は皇室だけでも血族相喰むの歷史である、アレキサンダー一世よりニコライ二世迄は殘酷なことはなかつたが、今度亡びる迄百年の間は國民と政府との爭であつて、陰謀暗殺に依つて彩られて居るのである、國民は政府を呪ひ、政府は壓迫强制を事とし、終りを迎へたのである、が世界陸地の七分の一を占め、皇室は一番の金持であつたが、夫れが一朝にして滅亡すると云ふ事は一寸吾々には考へられないが、それは上述の如き不自然の集りであつたが故、砂上の樓閣に終つたのである、今日の日本の狀態、危險思想の續發は殊に相當教育を受けた側に多い樣である、一面より見ればロシアの經過に太分似て居るのであるが、今夫れに就てはクドゥ々云はぬが、ロシヤは初手百二三十年前にインテルゲンチユアと云ふ自覺階級知識階級と云ふもの

が出來た、圖體ても會合ても無いが、夫れは不自然ではいかんと云ふ覺醒の叫であつた、夫等が初に主張して居るのが國民解放の爲の戰と云ふのである、兎に角ロシヤは地理上歴史上不自然のことのみ多いから自然に社會の狀態が不自然になる、之れではいかんと云ふ聲の揭つたのは必然の結果であると思ふ、それは農民一般も家族制度でなく、互に沒交渉であり、又知識程度も低い、夫れに壓制を加へて犬猫を扱ふ樣にしたことは一寸ロシヤの本を讀んでも涙が出る程である、だから相當の人道と云ふ樣なことを考へる人が一方に起るのである、國の爲には果して幸か不幸か知れないけれ共、當時のロシヤには起るべき筈であつたのである、國民の解放の爲に戰ふと言ふ階級が出來ざるを得ない、それが漸次勢力を得て貴族官僚を敵とし國内は治者と被治者に分れ、同國民の觀念は遂に消へて、氷炭相容れざる二つのものに成つて了つた、ペートル及ペートル以前より天然不拔の故障のある迄は外に外にと擴がる國民であつたから、領分を弘める爲には萬物を征服せねば止まなかつた、だからロシヤの歴史は征服の歴史である、征服に伴ふものは武力と權力である、我國の三千年の歴史君臣情に於て父子とは大に其趣を異にして居る、外を攻むるに武力を以てし、内を治むるに權力を以てす、だからロシヤ位缺陷の多い國は無かつたのである、英國はデモクラチックて基礎を固めて漸次擴げて行つたのであるから問題は起らないが、ロシアは王の役は只征服のみて行つたからして、行詰りの太平洋では日本と衝突した樣な始末である、やがて擴りが止つて、さて内を省れば征服を以て成立したる國は家族制度の我國とは大に異ふ、人種百幾種、言語五十何種は明に其經過を語つて居る、祖先より子孫に傳ふる歴史もない、動物は只生母のみを知ると云ふが、動物は親子の情は强いのである、烏に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮ありと云ふが、動物は親以外には知らない、が人間は祖先に泝ることが出來る、顏を見ずして祖先を知ることが出

來るのである、がロシアはかゝる狀態であるから、一萬八九千萬の國民と云ふものが只寄合つて居ると云ふ迄である、ウイルソンの民族自決は自然に幾分復古して來た思想であるが、新聞では民族自決でロシアが十ヶ國に分れて居る樣であるが、歐露十ヶ國が只集つて居たのである、只法律政治の機械的團結であつたに過ぎないのである、世界中最も不自然なるかゝる國の國民になつて居れば、不自然なる國民になつてしまふのは當然のことである、「吾人はデーの國民に非す天の民なり、吾人は露國の民より解放せられて、理想の國に生活す」など云ふ文句は尤もらしいが、夫れは彼等の如く不自然に取卷かれて居る者に取つて當然の事であつて、吾人としては玆に大に考へなければならぬ點である。

例へば繼子がある、家庭に於ては飯も祿々與へられないから止むを得ず買喰をする、母子意志の疎通を缺くからして不愉快である、だから外へ泊る樣にもなる、之は繼子の方から云へば無理もない事であらうけれ共、又一方暖き家庭に育つて父母の膝下に慈まれて居る子供が、繼子の眞似をしたならば如何であらうか、今の日本人は恰も家柄の息子が繼母の手に育つ子供の經過を知らずして本能主義に走るのを眞似やしないか、吾人は常に溫情の單位の上に成立して居るものである點に思を致して、外來思想喚起の原因を檢べなければならない、夫れにはロシアが最も適切なる例であると思ふ、歐洲諸國は形の上には文明である、吾人は暖い中に育つて來た事を忘れて、獸類の集りが自由とか本能とか云ふのを矢鱈に飲込んではならない、日本は神を目當に一歩一歩進むのである、十界の中には歐露は餓鬼畜生である、吾人は下を見てはならない、佛界即神の方に眼を向けなければならんのである、私は六十にもなつて居るが日蓮上人が有難くて後生を願ひに來てるのだらうと云ふかも知れないが、之れは人生の主意である事を忘れてはならない。

教義

日蓮聖人教義綱要（第五十二回完了）

井村日感

第十二章　總結

第二節　勸信の聖語（下）

我等がはかなき心に推するに佛法は唯一味なるべし、いづれもいづれも心を入れて習ひ願はゞ生死を離るべしとこそ思ひて候に、佛法の中に入りて惡しく習ひ候ぬれば、謗法と申す大なる穴に墮ち入つて乃至十惡五逆の罪人よりもつよく地獄に墮ちて阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬ事の候けるぞ。（妙法尼抄、縮遺一七七〇）

自稱佛敎通と唱ふる輩の頂門の一針である、佛敎は應病與藥で何經でも我等の好む所に依つて差支無い杯と云ふて居るものも澤山あるが、此等は皆謗法の大罪を犯して、永久に地獄の苦痛に泣かねばならぬ運中である、佛陀施化の元意を能く理解して、其統合歸一したる一佛乘の敎に依つて救濟を求めねばならぬのである。

何に法華經を信じ給ふとも謗法あらば必す地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し、毒氣深入失本心故は是也（曾谷抄遺一五一五）

縱令一佛乘の法華經を信ずるとも、佛意に背き經意を誤るならば、是同じく謗法罪にて地獄に墮ちねばならぬ、漆千杯に蟹の足一本、其量に於ては多少の相違はあるが、極少量の蟹の足一本にて澤山の漆が其力を失ふが如くに、聊の謗法の爲に折角の信仰が無駄に成つて仕舞ふことに成る、謗法に爲らぬ樣愼重の態度を以つて信仰をせねばならぬ。

千年のかるかやも一時にはひとなる、百年の功も一言にやぶれ候は法のことわりなり。

（兵衛志御返事遺一三二五）

と仰せられたのは同じ意味で、折角の信仰も唯一返の謗法の爲に消失せることを警告せられたのである、返す〳〵も謗法に陷らぬ樣注意肝要である、日蓮聖人の最後の御嚴誡に

日蓮は日本第一の法華經の行者也、日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ、梵天帝釋四大天王圓魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乘りて通り給ふべし、此法華經は三途の河にては船となり、死出の山にては大白牛車となり、冥土にては燈と爲り、靈山へ參る橋也、靈山へまゐまして艮の廊にて尋ねさせ給へ、必す待ち奉るべく候、但各〳〵の信心に依るべく候、信心だも弱くはいかに日蓮が弟子檀那と名乘らせ給ふともよも御用は候はじ、心に二つまして信心だに弱く候はゞ、峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思召せ、大阿鼻地獄疑あるべからず、其時日蓮を恨みさせ給ふな、返す返すも各の信心に依るべく候、

大通結縁の者は地獄に墮ちて三千塵點劫を經候き、久遠下種の輩は地獄に墮ちて五百塵點劫を經たる事、大惡知識にあふて法華經をおろそかに信ぜし故也、返す返すも能く信心候て事故なく靈山へまゐりまして日蓮を尋ねさせ給へ、其時委しく可申候、南無妙法蓮華經

弘安五年十月七日　　日蓮在御判

波木井殿其外人々　　（遺二一一四）

此御文章は御臨終一週前に御認に相成つたので、御文章としては最後のものである、言々肺腑に徹する御慈教である、我等の信仰の薄弱なるを憂へて鞭韃せられたのである、我等が信仰に誤りなく、強盛に其信仰を維持するならば、日蓮聖人は靈鷲山の艮の廊にて待つて居るぞと仰せらるゝ、何と難有御思召てはないか、我等が如き禁味の一信者を態々御出迎遊ばさるゝと云ふ慈愛の御思召は實に勿體ない事であります、此を思へば我等の信仰は輕々しく取扱ふ事は出來ない、『但各々の信心に依るべく候』との御一言は實に實に我等に對する最大なる訓誡の御言葉である、今や聖人御門下の名を唱ふもの幾千萬、其内の幾何が聖人の御出迎を受け得らるゝか、大多數は三五の塵點を經るの流類ではあるまいか、御文中『心に二つましまして』とは、現今の雜亂の信仰、迷信雜信の輩を言ふのである、此等は聖人の御門下と稱しながら大阿鼻地獄疑なきの連中であらう、『其時日蓮を恨みさせ給ふな』彌地獄に墮ちてから、こんな筈でなかつた、南無日蓮聖人助け給へと云ふても最早及ばぬ事である、現在の内に正しき信仰に立歸らねばならぬ、何卒私共は『返す返すも能々信心候て事故なく靈山へまゐりまして日蓮を尋ねさせ給へ』と仰せられた方に成らねばならぬ、此御文は再三繰返拜讀致されたい。

但信心のよはきものをば法華經を保つ女人なれどもすつると見へて候、例せば大將軍よはければしたがふものもかひなし、弓よわければ絃ゆるし、風ゆるければ波ちゐさきは自然の道理なり。

（四條抄遺一〇八三）

信心弱くしては法華經を持つと云ふとも何にもならぬと云ふ事を仰せられたのである。

但御信心によるべし、つるぎなんどもすゝまざる人のためには用ゆる事なし、法華經の劍は信心のけなげなる人こそ用ゆる事なれ、鬼にかなぼうたるべし。

（經王抄遺九八六）

法華經の信心は精神の確固なるものでなければ成效しない、腕の出來たものが刀劍を使へば役に立つが、腕の出來ないものが使へば我身を傷ける位のものである、各自の信仰の力が強ければ強い程法華經は其力を現はし得るものである、各の信仰の力に依つて法華經は役に立ち方が違ふて來るのである。

師子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし、例せば日蓮が如し。

（佐渡御書遺八二五）

師子王の如き堅固の信仰あるもの必ず成佛すべしと言はれたのである、同じ意味で、

願くは我弟子等は師子王の子となり群猿に笑はるゝこと勿れ。

（師子王書遺續一二八）

と御奬勵遊ばされてある、師子王に日蓮聖人を例し、我等弟子檀那は師子王の子なりとの自覺の下に強き信仰を勵むべきを教訓せられたのである。

汝等は人をかたうどとせず、日蓮は日月帝釋梵王をかたうどとせん。

（妙一女抄遺一九六九）

我等が信仰は佛性の自覺より發したる心靈の光である、時に凡夫輩の嘲笑もあらう、迫害も加へらるゝであらう、之を堪ゆるの信仰でなければならぬ、王難もあらう親族も背かう、それを忍ばねばならぬ、其時の覺悟を語られた御文である、我等が信仰は凡夫共を相手にするのでは無い、上は佛菩薩下は梵釋等の照覽の下に起したる大信仰であつて、世間の毀譽褒貶より超越すべきであることを敎へられたのである。

只願くは經を持ち名を十方の佛陀の願海に流し、譽を三世の菩薩の慈天に施すべし。

（持法華問答抄遺四七一）

と仰られたのも此意義である、我等が信仰は佛陀の御前に於て善哉善哉の御言葉を頂戴する樣にせねばならぬのである。

問て曰くまことに今度生死をはなれんとをもはんに、なにものをかいとい、なにものをか願ふべきや、答ふ諸の經文には女人等をいとうべしとみへたれども、雙林最後の涅槃經に曰く中略菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無れ、惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ、何を以の故に、是惡象等は唯能く身を壞りて心を壞ること能はず、惡知識は二俱に壞るが故に、惡象の如き唯一身を壞る、惡知識は無量の身無量の善心を壞る、惡象の爲に殺されては三趣に至らず、惡友の爲に殺されては必ず三趣に至る等云々此經文の心は後世を願はん人は一切の惡緣を恐るべし、一切の惡緣よりは惡知識をおそるべしとみえたり。（顯謗法抄遺四四五）

我等が薄弱なる信仰は常に動搖を免れない、見佛聞法常に佛陀にいそしみ敎法を聞いて策勵せられつゝ、やつと維持せられて居る樣な力弱き信仰である、若し惡知識あつて誘惑せらるゝあらば直に退轉する樣な脆弱なものであるに依つて惡知識に遠ざかることが最も大切なことである、涅槃經の御文は惡知識の最も恐るべきを御敎訓下されたので肝に銘じて置かねばならぬ御文である、法華經妙莊嚴王品に

善知識は是大因緣なり、所謂化導して佛を見、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得せしむ。

（經法四六一）

とは、善知識に依つて成佛の大因緣を結んだことを言ふたのである、善友に親近して惡知識を捨つるは我等が信仰の維持に大切な事柄である。

總じて日蓮が弟子檀那等自他彼地の心なく、水魚の思を成して異體同心にして南無妙法蓮華經と唱へ奉る處を生死一大事の血脈とは云ふ也、然も今日蓮が弘通する處の所詮是也、若然らば廣宣流布の大願も叶ふべき者歟。（生死一大事血脈抄遺七四三）

異體同心なれば萬事を成じ、同體異心なれば諸事叶ふ事なしと申す事は外典三千餘卷に定りて候、殷の紂王は七十萬騎なれども同體異心なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異體同心なればかちぬ、乃至日蓮が一類は異體同心なれば人人すくなく候へども大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと覺へ候。（異體同心抄遺一〇五五）

日蓮聖人御門下は異體同心にして廣宣流布の大願を成就せんことこそ大切な任務でなければならない、徒らに舊慣を墨守して蝸牛角上の爭に熱中し、迷信雜信を鼓吹して聖人の正義を紊り何等愧る處なきの現狀は實に慨歎の外なき次第であります、聖祖門下一統覺醒一番大に祖道に貢獻せねばならぬことを

（以下六十九頁に次續）

思想問題

遠慮なき皇道大本教の批判

記者

(七)霊主體從の說は大本作成の戲論にして何等の價値なきが如きも、鎭魂歸神の法と相俟ち人心を蠱惑し、社會の良習を破壞せんとする毒素を包含す。

大本教宣傳者の言に據れば、皇道大本教の鎭魂歸神法は、既成宗教が二三千年來の努力に依て未だ完成し得ざる宗教本來の目的たる、霊主體從の目的を達する事が出來るので既成宗教を超越し、既成科學の力では到底解釋する事の出來ない天授の神法である、從て既成宗教の目的とする處は、大本教を待て初めて大成せらるゝ譯であると云ふ事である（批判八九）、されど霊主體從が宗教の目的であると云ふは、餘りに獨斷的であるのみならず、鎭魂歸神の法を以て果して此目的を達するや否やも疑問である。況して綾部に行つて大本の神に仕ふるのが人間の道で、世間にあつて眞卒に活動するのが人間の道を全ふする所以でないといふ事は決してあるべからざる次第である、己れの業務を捨て家を捨て妻子を捨て財產を捨て、綾部に行きて神に仕へんとするが如きは寧ろ不心得の骨頂である。凡そ宗教の難しとする處は世間的に活動しつゝ正しく道を踏ましめんとするにあるので、神變不思議なる奇術の教練を經て神に仕へ、世務に超越せんとするが如きは決して宗教の本志にあらざるは極めて明白である。大本教は自ら宗教にあらずと唱ふるも、神人の交接を說き神に信仰を捧げんとするも、尙且宗教にあらずとは如何なる理由によるか、若しも大本の主張の如く宗教にあらずとせば、未だ宗教たるの資格なしと自白するに過ぎざるものと吾輩は信ずるのである、成る程大本教には宗教として見る丈けの教義が絕無である、何に致せ大本に於ては鎭魂歸神の法を行ふは信者の訓練上必要なる事項として、これを重視するのであるが（歸神法は其の筋の注意により中止したそうだ）、一體鎭魂歸神なるものは其の目的とする處果して何れに在るであらうか、大本の說によれば鎭魂とは遊離の霊魂を召集して身體の中樞に安處せしめんとすると云ふので、つまり霊魂の培養法とでもいふべき筋のものであると云ふ事である、又歸神法といふは俗に神懸りと稱するので既に鎭魂によりて養はれたる霊魂が動的狀態に移り、幽冥に通じ神通力を發揮するのを主眼とし、鎭魂の狀態に入りたる後守護神が此肉體を使用し、種々の不思議を示して相當に注意すべき結果を生ずるので、歸神法の價値は神人合一の狀態に進み、本霊と分霊との感合を目的とするのである、併し此場合に於て大本の所謂守護神なるものが、歸神の狀態に於て其の全能を發揮するので、若し其の守護神が邪神である以上は其の人をして邪道に入らしむるの患なき能はざるは勿論、如何に霊主體從の實を擧ぐるとも、寧ろ反て恐るべき惡結果を見るに至るべきは無論である。

元來霊魂の實在より云へば、各人の霊魂は宇宙の大霊に統一さるべきもので、肉體を離るゝと同時に一源に歸すべきものであるとの說と、今一つは霊魂には本霊と分霊との二種あり、本霊は宇宙の萬霊を

統一する大靈で、一つは各人の分靈であるとの說であるが、大本の說く所の本靈なるものは天御中主神で、分靈は即ち各人の靈である。而して其の間には八百萬神の權限によつて千萬無限の階級に分たれて居るが、要するに同じ谷川の水である、併し分靈は常に塵埃に覆はれて光明を殺がれて居るので、この塵埃に覆はれて居るのが人で、本靈其儘の光を發するのが神であると云ふ事である。神は慈悲の念を以て如何にもして萬民の塵埃を掃はんとしても、油紙に水を注ぐ如く受けつけないので、常に痛嘆して居らるゝのである、故に各人は努力修業してこの本靈に合致せしめなければならぬので、其の捷徑が鎭魂歸神であるといふのが大本の所說である（批判一五六―一五七）、如何にも一應尤もの樣にも考へられる、併し大本宣傳者は例の言靈學を挿んで、靈の存在を確證せんとして反て滑稽に陷るのは氣の毒な事である、其の說によれば靈は古語では（ち）て體は（から）である、體は要するに容器に過ぎず、靈はこれに盛つた血であるなどは夥しい言草である、而してこれを連結して「チカラ」となるといふに至ては彌々甚だしい（批判一五七）、果して然らば力は即ち血殼となる譯で、體其れ自身は何等の靈魂も精神も意識もない事となりはせぬかと吾輩は信ずる、然るに大體では普通の人は體主靈從であるから、どうしても靈主體從の人となさなければならぬ、これが大本の最大主張であると云ふのである、果して然らば體それ自身にも意識あり活動あり、矢張相當に獨立的存在を營み得る如く見ゆるが、果して然らばこれは怪物である、行燈に足が生へて躍り出す底の滑稽である、鏡の中から手を出して顏を拭いて呉れる底の妖怪である、要するに體は容器である以上は靈が入らなければ活動がない、惡靈が入れば惡業をなし、善神が入れば善業をなすべきであるのに、大體の人は一方にはこの正說を吐きながら、全體に於ては靈主體從などゝ唱へて、靈體の分立存在を許すが如く云ふのは如何なる事か、體主となつては何の作用もない事になるではないか、苟も人にして活動する以上は其の善惡に關せず悉く靈主體從でなければならぬ譯である、大本の先生達はこの簡單な疑問に對しても果して答へ得るかどうかは吾輩の疑問である、殊に神は如何にもして萬民の塵埃を掃はんとしても、油紙に水を注ぐが如く受けつけないので、常に痛嘆して居らるゝなどは心細い神樣である、神樣の力では到底及ばぬので各人の力を以てこれを迎へて欲しいと云ふのは、言ひ代へて見れば神魔兩立の世界と云ふ事である、人間樣の御力によらなければ神は魔に勝てぬといふ格である、果して大本はこの低級なる思想を脫する事が出來ぬのであらうか。

大本の說によれば天の御中主神は、萬有唯一の神と云ふ事であるが、其の實さうではなくて外に天の御中主魔と云ふ厄介なものもありさうな話であるが、これは吾輩の承認し得ざる處である、併し此處は吾輩の議論を發表すべき場合でないので、遺憾ながら默して止むのであるが、もし神魔兩立體靈相對が大本の思想とすれば、體は魔の城廓、靈は神の所在とでも云ふのであらうが、神魔の間斷なき大合戰の下に我々人類は塗炭の苦を受けつゝあると云ふのであらうか。兎にも角にも我々人間の生存の有樣は、靈體の爭ひによつて顯はされて居るので、寧ろ靈的性能の働きは常に體的性能の下積となつて、少しも動きの取れぬことになつて居るのである。或は靈が勝たり、或は體が勝たりする間は未だ多少の光明を認むべきであるが、絕へず體勝靈敗で體主靈從の惡世界の展開のみであると、大本の云ふが如く果して然りとすれば、天の御中主神は今や既に敗北である、敗軍の將である。而して人間の反省によりて其の生命を持續せんとするの苦境にあるらしく見える、何故に一吹きに彼等魔類を吹き飛ばして仕舞はないの

か、大本の見たる天の御中主神は果して如此く微力なる神であるか、果して然らば所謂四魂の働きなるものも気の毒なもので、大本の自ら云ふ如く荒魂は勇と顯はれずして爭鬪となり、和魂は親しみにあらずして嫉みと惡しみとの惡德となり、幸魂は仁愛にあらずして殘酷となり、奇魂は智慧にあらずして狂暴となるのみではあるまいか（批判一六一）、天の御中主神は何として御坐るのか、誠に勿體ない事であるが大本の天の御中主神は眞の神か、そも又眞の神を假面とする僞の神か、宇宙の生物は靈體共に天の御中主神に統一さるゝものと、何故に大本は言はぬか、天に晴雨電雷あるが如く人生も亦色々の變化を以てその序を整ふるのである、譬へば海水の腐敗せざる爲には波浪の存在を必要とするが如きもので、惡其の物は惡むべきであるが、惡人其の人は惡むべきにあらずして憐むべきである、つまり芝居の敵役を務むるが如きもので、これにより社會の清例を維持するのである、吾輩は靈にも表裏あり、體にも表裏あり、靈體同樣に善惡があるので、其の善を取りて其の惡を捨つるのが正道である、如何にするも靈主體從などの原理を承諾する事が出來ぬ。大本と雖も惡靈の存在を認めて居るのではないか、果して然りとせば大本の所說は自家撞着である、大本の說は如何なる故か首尾一貫せず、前後整通せざる事が多い樣である、右の原理は大本でも部分的に承認せざるを得ぬので、直靈曲靈の別を論じ曲靈を以て低級な動物の靈即ち野干天狗等の靈として之を見るので、これは天の御中主の靈ではないと言ふ事になつて居る（批判一六一―一六二）、つまり世の中は天の御中主神と狐狸天狗の連中との爭鬪で、人類は天の御中主の御末でもあり、正しい事でもあるからこれを助けて彼等を追拂はなければならぬと云ふ事に歸着するのだ、これは一應御尤の樣にも見ゆるが、果して然らば狐狸天狗の連中は天の御中主神の分身にあらずして、天の御中主魔の分身と云はなければならぬので、吾輩の鋭れに肯定したる批評を更に確定する事になりはせぬかと思ふ、天の御中主神といふ神樣はそんなケチな神樣であるとは吾輩は信ぜぬ。

それから又大本では靈主體從の理を闡明せんが爲め、守護神なるものを認めなければならぬ事になつて居るが（講話三一二）、これなども誠に滑稽なものである、大本の說によれば鎭魂歸神の目的は惡靈を拂ひ、正靈に歸せしめ神の存在を知らしむるので、畢竟神人感合の法であるといふ事である（批判一六二）、更に進んでこれを言へば妄想意慾を除去し邪靈邪念を絕緣し、（つまり惡靈の作用を絕ち）惡靈の爲に追放せられて宙に迷ふ靈魂を身體の中府に招還安處せしむるので、つまり宇宙の大本靈即ち天の御中主神の本靈と、各自の分靈とを交感同交せしむるにあると云ふ事である（批判一六三）、果して然らば身體の中府とはいづれの事を云ふのであらうか。

そこで大本で云ふ身體の中府とは如何なる處なるかといふに、所謂臍下丹田が即ちこれであるので、腦を機關として働く精神作用から全然獨立に、臍下丹田に集る靜的狀態（即ち鎭魂）の靈魂が神懸りの動的狀態に移り、靈の發動が我々の肉體の口や耳等を使役する狀態に進んだのが歸神の境地に進んだのだといふ事である（批判一六四）、換言すれば腦中樞の境界を脫し、臍下丹田が精神作用の根本となつて働くので、つまり頭腦と臍下とに對する靈魂の交涉作用が眼目になるのであると見える、即ち腦の働きの代りに臍下に培養せられた靜的靈魂から直接に口耳手足等に働きを移すのであるかの如く見えるのである。（批判一六四）果して然りとせば靈の中樞機關が丹田で體の中樞機關が頭腦であらねばならぬ、しかも靈の中樞機關たる丹田は主として惡靈の占領する處となつて居るので、必ずしも正しき靈の位地ではないとすれば、この點に對してもうつかり聽き流す事が出

來ぬが、兎にも角にも中心を兩所に見るの思想は人心を鎌倉時代に導くが如きもので、大義名分上以ての外の議論である、古來主神を臍下丹田に落ち付けると云ふは道上したる狀態を寧靜ならしめんとする事で、つまり腦の働きを靜めんとするの一教訓に過ぎぬ、決して腦中樞の主神作用より轉じ、臍下丹田（吾輩は臍下丹田に如何なる機關あるかを知らぬのである）を働かせようとするのではない、是程明諒な事までも曖昧にし、腦は惡靈即ち魔の宿る處、丹田は善靈即ち神の住する所なりと思はしむる如き言說を用うるは斷じて許し難き處である、假に一歩を讓り主神を臍下丹田に安住せしめ、臍下より命令を下して頭腦を支配し、頭腦をして靈的に動かしめ、依て以て體的動作により救ふと云ふ事ならば、何となく一理なきにあらざるが如きも、（大本は或は然りと稱するならん）こゝに大本の人々に聞きたいのは、丹田にも主神作用を起すべき機關があるのであるか、神經の中樞の腦にある事は幾多の實驗上明瞭な事で、これをも否定し頭腦にも臍下にも共に主神作用を起すべき中樞機關を有すと唱ふるならば、大本の議論は確かに暴論であるか、或は愚說である、加之大本の人は頭腦を機關として働く精神作用に獨立すと明言する以上は、頭腦と連絡なしと言ふ意味をも承認するに相違ないのである、試に問はんに體的惡靈より壓迫若くは追放せられた吾人の善靈は、吾人の體內の何れにあるや、或は吾人を離れてフラ〳〵として吾人の周圍をうろ附て居るのであらうか、或は又臍下丹田に窮命せられ下積となつて、小さくなつて居るといふのか、大本では兩方ある樣に云ふて居るが、つまりは臍下丹田の回復戰を宣するのであるであらうか、果して然らば如何にも痛快であるが、其の臍下丹田を回復するのは必ず善靈であると決定し得るのであらうか、狐の代りに天狗が來たといふが如き事決してこれなしと確信し得るであらうか、

萬が一には如此ことあらば靈主體從もあてにならぬではないか、右の點に對しては大本も餘程御心配と見えて、審神と云ふ避難所を設けてあるのである、これは用意周到と云はうか、奸譎といはうか、兎にも角にも拔け目のない事である、武內宿禰は「沙庭」の元祖であるなどは如何にも史上明白な事ではあるが、狐か狸か或は天狗か、神功皇后に御付申上たかも知れぬので、これを審判するが爲武內が沙庭となつたと考へしむるが如きは、誠に不謹愼の極である、それとも審神なるものは尙も必要であらうか、若しも實際必要ならばそれは狐狸天狗の族が僞りて善神の假面をかむり、動もすれば鎭魂歸神の崇高なる神境をも占領するからであらねばならぬ、果して然らば大本の神都にも矢張狐狸野干の醜族が跋扈して居るものと見ゆるが、それにても尙世界唯一の神境としてこれを尊ぶの價値あるであらうか、然るに事實上大本の鎭魂歸神の場合に於て顯はるゝものは、主として神か野干であると云ふに至ては驚くの外はないのである。乍去何に致せ大本には審神と云ふ一種奇妙な半神が居て、この半神がなければ鎭魂歸神の法が出來ぬといふ事である、而して大本の說に依ればこの半神の先生達は神意を受けて、神の正邪を判別し邪神を叱り飛ばす審判官兼法官の樣なものであると云ふ事だ。若しこれが事實ならば如何にも調法な話だ、併し審神は天眼通を得て居らぬ、其の人に聞かなければ其の神の正邪の判斷が出來ぬ樣な低級の神を審判官とは受取れない、先陸海軍の演習の審判官位のものだらうと吾輩は察するのである、況して審神なるものは神憑りの狀態にある人に對し、其の憑依の神の正邪を見分て邪神の退去を命ずるのが關の山で、何等の根底的制裁を加へ得ぬと云ふに至ては誠に心細い事である、宜なる哉大本に來りて神憑りに遭ふの人は、主として邪神の憑依するを發見するや、吾輩は大なる疑を以てこれを看るのであ

る、大本は邪神の集會所ではないか、高天原と稱するが如き神々しき靈地即ち神の國には邪神の入れらるべき處ではないに、大本の靈場に於て勝手に惡神のみならず狐狸野干の醜類の顯はるゝなどは、會以て大本の高天原にあらずして、惡鬼邪神の集會所にして從て住者は主として是等惡神の醸弄する所となるのではないか、果して然らば大本は魔界である、蛇や狐や狸の靈のウョ〳〵存在する最も醜惡なる土地にして、士君子の近づくべき處ではないと斷言せなければならぬ。大本の徒たるもの若し眞に此世界を神國となさんと欲するならば、人の大本に來るものは神心自ら神境に入るの思あらしむるのみならず、狐狸野干の族の附隨し來るものは大本に入るを得ずして退去するが如き大威靈を示さなければならぬ、古來より吾人の傳ふる靈場なるものは、若し人あり汚れたる身を以て其の地に入らんとする時は、身體自ら窘縮して入るを得ずと迄傳へられて居るのである。假令惡鬼身に宿るも大本に近づく時は惡鬼自ら去り、大本に入れば善神來て身に宿り、大本を退くも善神其の儘に其の身を護りて惡鬼は再び歸る事を得ずと云ふが如きに至て、始めて大本の神境なるを認むべきである。佛說にも須彌山に近づく鳥は金色となるとさへ傳へて居るのである、然るに其の實際に於ては鎭魂歸神の行法の際、狐狸野干の勝手に出入するが如きは、會以て惡魔の侵入を防ぐの力なきを證するもので、大本の殿堂は神魔倶樂部とても稱すべき位のものである、と謂はざるを得ぬのである。

加之大本宣傳者の言によれば、大本に於ける審神の職務實行の樣子は誠に滑稽である、「貴樣の言ふ事は欺瞞だらう」などと狐の靈と押問答をするなどは本氣の沙汰ではない、審神者なるものは大本の云ふ如く實際大神の神勅を受けて邪神の正邪を分つと共に、審判の力を大神より賜はつたものならば、當人に聞くに及ばず一言にして叱り飛ばす譯ではないか「狸と云ひましたが、實は狐であります」などゝズウ〳〵しく言ふてのける奴を、更に特別鎭魂神の高等法院に送るなどはどうした事か（批判一七二）實に以て怪むべき事である、審神の前に實を吐かぬ横着者があるとすれば、場合によりては低級なる審神者を馬鹿にする邪神もあるであらう、現に吾は艮の金神なりと强辯するものすらあると云ふ事である、そんな馬鹿にされる樣な手合から鎭魂して貰ふて果してどうなるのか、折角大本の所謂靈主體從を實際やつて居る人が（所謂體觀念若干ありて、そこに惡ずれのした狐が憑つたとすれば）萬が一審神にかゝつて體的惡靈を靈と錯信して、實際に體主靈從にてもなられたならばどうする積りか、大本といふ大狐に魅せられて、自分の幸福のみに憧憬し、國を忘れ家を忘れ人倫を滅却して、得色ある大々的體主靈從の人もないではない樣だ、信僞は知らぬが、大本攻擊者の言によれば、大本の大幹部には大々的體主靈從の行爲をする人もあると云ふ事であるが、誠に嘆かしひ事である。

さりながら假令滑稽な說明とはいへ、大本の論ずる守護神のことは聊か興味あり、まんざら捨てたものでもない樣に感ずるのである、大本の說に依れば洋の東西に論なく、人類には少くとも三柱の神靈が附て居るので、其の一は其の人の出產と同時に守り神となる神樣で正守護神と云ひ、其の一は自己本來の靈で本守護神と云ひ、又他の一は後天的に割り込み來る押懸婿の如き神樣にして副守護神と稱するといふ事である、而してこの副守護神といふは大抵邪神で、つまり本人の靈をそゝのかして喰ひ物にしようとするので、出生の際に太神より御附けになる正守護神はこれと爭ひ、そうはさせぬと致して居るので、つまり此方の神樣は立派な人に仕立てる神樣であるのだ、而して本守護神は頭腦を中樞とし全體に

通備する幽體で、太神の分靈それ自身であると云ふ事である（講話三一一）此處に至つて考ふれば、太神の分靈と善友の如き正守護神と、惡友の如き副守護神との關係に出來て居る大本の所說は、土臺から支離滅裂の痕跡を認めるのである、乃ち鎭魂歸神によつて見はるゝ憑靈は正副兩守護神で、齊下丹田の爭奪戰をなしつゝ丹田を中心として働く先生達で、腦を中心として働く本守護神ではないと云ふのである、そうして腦を中心として働く本守護神の活動は體主靈從にして、大本敎の認容せざる處であらねばならぬ（前文參照）然るに大本敎は頭腦を機關として働く精神作用より獨立に、齊下丹田に集る陰靈が活動を初めるのが神懸りの狀態であるといふので、つまり本守護神たる大本靈より本人に分たれたる分靈は活動を失ひ、他より轉入し來れる他の靈が幅をきかす事になるので、主人は唯垂拱若くは唯々として他に委すの狀態である、果して然りとせば神懸りの狀態に於ては各人本來の面目を現はさずして、正副憑靈の爭ひに過ぎぬので、つまり個人の獨立を失ふ狀態である、主人を無視して寄宿人が威張るといふ體裁である、これをどうして歸神と謂はるゝであらうか、正當の歸神は正守護神と副守護神の直接的活動や專横的强制を去り、本守護神たる本靈に身政を奉還するといふのでなければならぬと吾輩は信ずる、德川氏や北條氏や藤原氏が歷史上傳ふる如き鹽梅であつては、如何に善政を布くも大義名分が既に紊亂して居るので、王政復古の親政を見なければ正當の歸神とは云はれないと信ずる、大本の歸神は果して斯くの如きものであるか、此點に就ては大本と雖も相當に理由ある說明を加へて居るのであるが、要するに防禦線を張るに過ぎずして具體的ではない、詰り下等な邪曲な守護神の歸順は歸神の豫備修行で、其の意味の神は合一の狀態とは謂へない、惡靈を拂ひ疾病を治し神の實在を知り心身の汚れを去るが如きは途中の仕事で、更に進んで時間空間を超越し至善至美至眞の大元靈に全く我身心を置くの境地に到つた事に於てのみ、鎭魂歸神の神法を雪解する事が出來るのである、一種の不可思議なる現象のみを見て、鎭魂的に神の極致に達したと思ふは間違であると云ふ事である。（批判一七八）是れは如何にも高尙の議論の樣だが、我心身を置く境地は分別し得ても、我心身とは何の事で本守護神の事が、「三神相共に」の意味か、而して又此心身を時間と空間から超越した考へに置くなどは大なる間違である、靈的作用は時空兩間を超越して居るのであるが、體的作用は如何にするも超越を許さない、必ず時間空間の約束によらなければならない、何は兎もあれ人間と云ふものは靈のみでない、體の働きが大切である、時間空間を超越したる超越的精神の獨舞臺となつては大變である、大本も他の敎も體によつて顯はす凡ての事を正しくするのが本面目でなければならぬ、是が爲には正しき靈の主張を主張するのだ、體の行動の免るべからざる時間空間を超越するなどは何事であるか、叔父さん達は高尙らしい事を云ふても、本當には何も分て居らぬかも知れぬのである。それから又大本の說によれば正守護神はつまり攝政關白の如きもので、天子幼冲なるが故に政を攝すと云ふ格であると云ふ事だ、（講話三一二）然るに此の關白が實權を握り、五十六十になりても之を天子に奉還せざるのみか、其の以前に於て既に其の德を失ひ、副守護神たる奸佞無比なる惡臣ばらに其の位地を奪はれ、身體の一隅若くは身邊にうろ〳〵して居るのが通例で、執念くも攝政關白の位地を回復せんとして煩悶して居るといふに至ては果して正氣の沙汰であらうか、而して此惡臣原の陸梁專肆に委せ、天子も又これに慫せられ、當世に見るが如き種々の放浪生活をなすに至るのが通例であるといふのは如何なる譯であらうか、幕府時代に關白樣も落ぶれて仕舞ひ、一天萬乘の君の御

威力のあれどもなきが如き時代を以てこれに比すれば感慨誠に無量である、而かもこの惡臣原を追ひのける爲神々の神たる太神樣は審神を使ふて鎭魂歸神をやると云ふので、つまり神樣の失敗談を聞くが如きものである、眞の神樣は果して如此ものか、大本の神は果して眞の神か、大政奉還をなさずして終生攝政をなさんとするが如き、正守護神は果して正しき神か、吾輩の信ずる處は決して如此ものではない。

吾輩の信ずる處は吾人の神は天地間の大活動其儘を體顯する人格的實在である、頓服的なる神人合一を欲求し得べき神にあらずして、神となるよりも先「眞の人」となるべく吾人を啓誘し給ふ至仁至慈なる高き實在である、決して狐狸と爭ふが如き低級のものではない、必ずしも造物者を神と意識するでもなければ、又必ずしも天地宇宙全體それ自身を神とするのでもない、法報應三身の具足を條件とする實在で、主師親の三德を備へざれば眞の神とは思はぬのである。此意味から不生不滅の如來(神も同樣)を神と信じ、御皇統を神と信じ、其の間に何等の疑ひをも起さぬのである、其の他古來の人傑君子聖人は悉く神の大なる分身として大なる神力を存する立派な神で、其の靈顯の仰ぐべきを信ずるものである、唯一神とか汎神とか乃至國祖神とか多神とか云ふのは吾輩の信ずる處ではない、吾輩の理想は統一神である、統一されたる大小の神祇其れ自身を神と信ずるのである、神人合一は究竟的目的で簡易なる而かも努力を加へざる怪しげな方法で、頓服的に成就すべき神人合一と自稱する似而非向上の神人合一を望まぬのである、充分に神人合一の實を擧ぐべき幾多の修養と鍛練とを積み、平靜なる而かも秩序的なる進路によりて神人合一の境遇に入らんと欲するのである、所謂妙怪なる神通力の如きは吾輩の寧ろ憫笑する處である、肉身の阿彌陀樣かと思ふて一生懸命に禮拜するのを他から見たら、田の中に腹這ひになつて「カカシ」を拜んで居る樣な滑稽を演じたりしないのである。大本の神は或は邪神でないかも知れぬが、中介の似而非神樣達にはどうしても信用を置くべき勇氣を吾輩は持たぬ、大本に仕ふるの道は誠心誠意神前に拜伏し何等の私心なき狀態に於て、淸き心を持て一心に神託を得ん事を願ふべきもので、其所に何等のカラクリもない至淸至純の處に神意が伺はるゝものである。貴樣は犬か猫かなどゝ爭ふ樣な不純不潔な境遇に眞の神勅を得べきものではないのである、全然私心なく淸き潔き境遇に於て自ら滴出し來るのが神諭で、神樣が見えるとか聞えるとか云ふなどは必要な條件ではない、寧ろあらずも哉の冗事である、十三歳の狐憑が名歌を詠んだなども實際怪しひものだ、事實としても修養上何の價値なき戯事である(批判一八一)、吾輩を信仰なきものと爲るかも知れぬが、假令これを事實としても神懸の憑靈が果して正しき靈か、決して分るものでない、劣等なる審神などは反て劣等なる憑靈をも正當と誤認し、人を迷はす傾向を生ずるであらう、直子も誠の神樣は滅多に御出になるものではないと筆先にも書てあるが、これは如何にも其の通りであらう、信ずるに足らぬ神靈、澤山の歸神は吾輩をして疑を抱かしむる所以で、疑はずに之を實行したならばどんな馬鹿を見るかも知れないのである、靈體二者の關係の濫用が基礎となり、更にまた變性男子、變性女子の說を生ずるなどは苦々敷事であるが、大本の最大なる信仰的觀念が實は此變性作用に對する信仰であるとは驚くべき事だ、大本の後の言に

眞の正しき大本信者たらんとするものゝ爲すべきことは、變性男子(教祖)と變性女子(教主補)との身魂の因緣を解明するだけで好いのだ。(講話一五三)

とある以上は最も嚴重に而かも公平に此問題を解決するの必要を認むるのである。如何にも苦しい解釋ではあるが、大本に於ては變性男子と變性女子との

名前の下に男女を勝手に變更するので、これは誠に奇拔な事である、變性男子の思想は元來佛教の說く所で何等珍らしき事ではない、變性男子とは外貌は女子でも其の內性は男子であるといふのである、何の新說でもない、これを靈的に解釋すると變性男子が經て、變性女子は緯であるといふのだ、男子と見へても從となり、女子と見へても主となるなどは形骸的變性連中といふべきであらう、是等變性連中の現實的適例は髮結の亭主でも分る、髮結の亭主は多く變性女子で髮結自身は變性男子といふべき資格がある樣だ、大本でも直子は變性男子で王仁三郎は變性女子で、王仁三郎の妻にして直子の娘たる澄子は變性男子であらねばならぬ。佛教の思想は女人の染汚を去り肉身は女子たるも男子たるの資格あり、立派な菩薩といつて差支なき場合に於て始めて變性男子と云ふので、要するに男子本位の思想より出たる方便說である、從て變性男子があつても變性女子と云ふ稱呼は少しく珍妙である、これは確かに大本の發明であらう、大本の說によれば男子及變性男子が經となり、女子及變性女子が緯となりてこの社會を織り出すと云ふ事であるが、尙其の大體に於て女子には男子の靈あり、男子に女子の靈あるを正道とする主張であるので、詮する所男子をば主として（併し勝手に）變性女子となし、女子をば主として變性男子にするのである、從て其の實際に於ては女子が經て男子が緯て、玆に髮結夫婦王仁三郎夫婦の如き關係を生ずるのである、（王仁三郎夫婦は果して婦唱夫隨の關係にある哉否やは吾輩の知らざる所であるが、若し世間一般の如く夫唱婦隨であるならば、王仁夫婦は神勅に從はぬものと認定せざるを得ぬのである）是等の事は旣に吾輩の概論し終つた處であるから、今更これを繰返すの必要を認めぬのであるが、大本自身と雖も恐らくは男陽女陰、男經女緯の現實に反抗する譯ではなく、敎祖直子及第二世の澄子を主とする爲には王仁三郎が從の位置に立つの必要より生じたる苦說とも見ゆるので、毘れ多くも　天照皇大神をも變性男子と仰ぎまつり、岐美二神の性をも變じ奉るに至つては誠に極端である、岐美二神に關する古事記の誤傳は淺野文學士の所說と反對に、淺野氏は岐尊を成り餘るの神とし、美尊を成り合はざる神として古事記其の書を引用するも、これに變性男子の意義を加ふるときは、淺野氏の說は大本としては通じ難き結果となる樣だ、それとも岐美兩神とも高神兩神と同じく變性の意義をなさぬ隱れ身の神となすや、綾部の敎祖以下歷代の敎主は女子にあらざれば能はざる神意なりなどは誠に苦しい事である、所謂御筆先に

變性男子の後の御世繼は明治二十五年の初發に出口直の筆先に一度書かした事は違ひは致さん、何事も出口直の後の二代の御用を勤めさすのは末子の澄が定めて在るなり、三代の御用いたすのが出口澄の總領の直靈に渡るしくみに定まりてあるぞよ、此の三代の直靈が世の元の水晶の嵐であるぞよ、綾部の大本の御用繼は末代肉體が婦女であるぞよ。（說明一九八）

果して然らば王仁三郎氏の後繼者は果して誰か、誰にても直靈の夫たらんものは豐雲野の後つぎでなければならぬと見える。

審神者に就き今一言云ふて見れば、審神者なき交靈術は邪靈の醜弄を免れず、故に靈怪の正體を嚴正に審判し得るのは地球上唯綾部の大本あるのみ、と は大本の豪語する所である、審神者其の人が果して眞の審神者ならば兎に角、若しも審神其の人が僞ひものであつたならば反て恐るべき害毒を貽すので、大本の毒を流す所以も又玆にありと思ふ、若し眞に人慾の私を去り、極めて公正なる態度をとり得る人格者が審神とならば、大本の言も少しは聽くに足るのであるが、如何せん如何はしき人物の來て審神者

たる場合に於ては、特に性慾の盛んなる又物質慾の盛んなる人物の來て審神者たる場合に於ては、途方もなき結果を生ずること欺なしと信ずるので、吾輩が大本を以て人心を惑亂し社會の良習を破壞するの因をなすものなりと斷定するは、一には此の邊に關する憂慮をも含むのである、大本の審神者は果して聖人の如き立派な人のみであらうか、靈系と體系とに關する大本哲學を今茲に述ぶるは少しく順序を失するの嫌あるも、其の謂ふ處元來開文字に過ぎず、其の主張も又何等の權威あるものにあらずとは吾輩の信ずる所であるが、何となく一種の滑稽味を有するが故に、參考として此章末に掲ぐるのである、靈系と體系との複雜なる交錯（講話一八三）に就ては大本の人等も大分其の說明に苦んだものに見ゆるが、其の論ずる所の大要を述べて見れば、

十の言靈元子は一の言靈元子に取捲かれ、一は又十に取捲かれ尙靈の裏には體があり、體の裏には靈があるから愈々分化複合し來つた所の吾等の見ゆるが如き此宇宙の萬象はナカ〳〵單純にあれば、靈系これは體彼れは陽、これは陰と定めらるべきものではないと云ふ事だ。

而して之を陽陰兩系に按配して見ると先づ、

陽系に屬するもの——高皇產神、火、左、靈、上父男嚴の美貌等。其の活用は左旋的積極的能動的なれど、經役にして內治に適す。

陰系に屬するもの——神產靈神、水、右、體、下、母、女、瑞の美貌等。其の活用は右旋的消極的受動的なれど緯役にして外務に適す。

火、左、靈、水、左體などは言靈學上の故事付に過ぎまい、それから其の言ふ處が面白い、左の手は外見は陽系であるが、其の用即ち運動は腦髓の右半に支配せられて居るので、其の內性は陰性で神產靈神と同じく右旋性を備へて居るから、左文字を書たり左螺釘を捻ぢるのが上手であるといふ事である、いく

ら苦しい故事つけとは云ひながら、こゝまで故事附ずともよさそうなものだ、左手の左文字などは左の方に動かすの容易なるが爲で、胴と手との關係である、第一左旋とか右旋とかいふのが可笑しい、人間の頭の旋毛を見たまへ、其中にあるものでも左旋もあり右旋もあり、右に偏して居ても右旋もあり左旋もあるのだ、男子の歩行は外輪に、女子の歩行は內輪であるのも同樣の理由によると大本はいふが、是なども取るに足らぬ議論だ、大本では此の道理も故事つけ女は右足は右旋運動、左は左旋運轉を起すから內輪になるといふが、これはたゞ日本の婦人丈けの事である、日本の女が伏目になつて歩行するのは衣裳の具合で、餘りに前を蹴出さぬ樣に自然と內輪になる位の事は誰でも知つて居る事である、それに大本の左右は普通の用ひ方と反對であるのも人の頭腦を錯亂して、此の薄弱にして低級なる理論をも解し難からしめ、其の間に自己に好都合なる主張に導かんとするの策略かとも思はるゝ位である。大本の先生達はいつまでも下若くは內の方からのぞいて左右をきめると見へるが、どれが果して正しき言ひ顯はしであらうか、要するに右左は自分の眼若くは心より見たる言ひ顯はしであるから、時計の針は右轉である、然るに大本は其の內部より見て左轉と云ふのである、右旋の頭の旋毛は大本流に言へば左旋である、吾輩はCを右旋Tを左旋と心得て居たが、大本流によるとCは左旋でTが右旋である、つまり吾輩の心得て居るのは向つて左右を云ふので、相對する場合には左右各其の稱呼を異にするのであるから、此點では大本の方が便利であるが、普通とは反對の場合が多いので、動もすれば解釋上困難を感ずる事が多い。

陰陽の別に關しても大本は大分怪しげな說明をするのである、假令へば右手を女系即ち陰系なりと固執するは體に捉はれたる議論であり、之に反して刀

を以て斬り込む時の右手は左手より前進し、兩刀使ひは右手を上手に左手を中段に構へ、積極的なる力は右手より出づるが故に右手こそ男系なりとは用に捉はれた議論である、（講八七）と大本では言ふのである、而して體に捉はるれば左を陽とし、用に捉はるれば右を陽とするので、陽に從ふのは概ね靈の陰陽に從ふのであるとは是亦大本の議論である、而して尙是即ち靈主體從の理で體に捉はれて靈を見ざる議論程氣の毒なものはないと云ふのである、これは恐らくは大本の先生劍術を知らぬと云ふ事になりはせぬかと思ふ、なぜなれば大本の先生は積極的なる力は右手より出るものと見て居ると見ゆるが、切るとき即ち打ち込む時には右手はほんの支で左手の力で切るのである、これは丁度鎗と反對で鎗は左手が前で右手が後であるが、鎗を繰り出して突き込む力は右手である、これは劍と鎗の自然的要求で必ずしも右は陽で左は陰だと云ふべきものではない。如茲半可通の議論を以て陰陽などを振廻すものではないのである、如此ことをむやみに捻り廻し陰陽の別を論ずるのは畢竟「出口家が代々女の御世繼であるぞよ」と云ひ度爲の魂膽であらざれば、この御筆先に道理を附せんが爲のカラクリであると言はれても仕方がなからう、何に致せ靈主體從と云ひ陰陽の說明と云ひ、鎭魂歸神の法と云ひ、皆これ爲にする處ありて作成したる一種の戲論で、眞に眞理を基礎として打ち建たる議論ではないと吾輩は信ずるのである、然るに此の混亂珠雜殆んど諒解に苦しむ如き說明を根强くも試むるのは確實ならざる基礎に其の論據を置き、しかも人をしてこれを信ぜしめんとするの致す處ではあるまいか、一言にこれを言へば靈主體從の議論にして其の根據を失ひたる以上は、大本其物の權威も全然滅却するので、執念强くもこれを論ずるのであると思ふ、宜なるかな流石直子は敎祖である、鎭魂歸神の宣傳を嫌ひ且又言靈學を嫌ふたそうてあるが、もし御筆先も無價値とならば大本は全滅であるので、この二種の追加は大本の爲には缺くべからざるものとなるのである、人心を疊惑するも世間の良習を破るも、大本の爲に是非もない事と見える、これにても大本の價値は知り得べきではないか、吾輩はこゝに斷言す、大本敎は僞敎である、邪敎である毒素の多き妖敎であると。

（四九頁より續く）

あろうと思ふ、持法華問答抄に曰く、

すべからく心を一にして南無妙法蓮華經と、我も唱へ他をも勸めんのみこそ今生人界の思出なるべき、南無妙法蓮華經

大正七年仲夏以來連載致しました本稿も今回を以て結了と致します、是に依つて幾分にても日蓮聖人敎義の大綱を御會得下されたならば講者の滿足は此上も無い事であります。

願以此功德　普及於一切　我等與衆生　皆共成佛道　南無妙法蓮華經

記事

統一閣月報

△十月一日土曜講義「撰時鈔講義」木村日保師「日蓮主義綱要」井村日成師、△二日講演「王佛冥合」村岡木曼師「日蓮主義國家觀」井村日成師「聖訓摘要」木多祝下、△八日土曜講義後茶話會、△九日講演「今後の宗敎」星野純義師「日蓮聖人の信仰生活」關田日城師「聖訓摘要」木多祝下、△十五日土曜講義「撰時鈔講義」木村日保師「日蓮主義綱要」井村日成師、△十六日講演「日蓮聖人の慈悲」高木日靖師「法華經の導尊と其弟子」笹川日堂師、△廿二日土曜講義「撰時鈔講義」木村日保師「日蓮主義綱要」井村日成師、△廿三日講演「信仰の除に慰ふ人々」安藤乾隨師「佛子の自覺」木村日保師、△廿九日土曜講義「撰時鈔講義」木村日保師「日蓮主義綱要」井村日成師、△廿日講演「佛陀觀の二方面」藤啓純師「題目の權威」小西日喜師「佛子の自覺」井村日成師

名古屋自慶會月報

○十月廿八日、菊井紡織七百名「人の本性」岡友文學士「佛敎の六善事」本多祝下、○廿九日、愛知時計一千名「神州の正氣を想ふ」

本多稅下、○同日、三菱內燃機壹千名「國民性の發揮」本多稅下、○廿一日、日本車輛八百名「何を組むべきか」本多稅下、○十一月一日、專賣支局女工一千百名「鹽原太助の傳」本多稅下、男工四百名「國力充養と國民精神」本多稅下、○二日、豐田本社八百名「一心太助の傳」本多稅下「人間性の研究」國友文學士。

第五部監督布教戰報

□十月十日於岡山本行寺「開會の辭」能仁事一師「日蓮聖人と滅罪觀」武田文學士「身手有力」山根日東師、□十一日於津山町上の町弘通所「開會の辭」能仁一十師、「黎明期の宗教」武田文學士「現代と日蓮主義」山根日東師、□十二日於土居小學校「自警團設立に就て」岡本村長「自治團の根本基調」武田文學士「自警自制に就て」山根日東師、□同日於本典寺「開會の辭」竹田氏「宗教の生活化」武田文學士「如來芸宿」山根日東師、□十三日於久成寺「開會の辭」吉塚師「文化氣値と宗教」武田文學士「如來使行如來事」山根日東師、□十四日於本經寺「開會の辭」三須師「現代と日蓮主義」武田文學士「發願喜心」山根日東師、□十五日於和氣本成寺「開會の辭」原田師、「黎明期の宗教」武田文學士「家庭と日蓮主義」山根日東師、□十六日於明治坊藤岡「開會の辭」中川日史師「懺悔滅罪に就て」武田文學士「日蓮聖人の人格主義」山根日東師、□十七日於神戸布教所「開會の辭」熊井本光師「懺悔滅罪に就て」武田文學士「詐欺救濟と日本の三聖」山根日東師

各地の思想戰

◎巡回教化　十月廿日於品川座品川町三業婦人慰安會八百名「慰安の二方面」淺井取締「人の寶」笹川曾正、△廿日於大井町第二小學校二百名「巡回教化の主旨」高本日靖師「國民道德の振興」笹川日堂師「社會主義の病弊」岩野少將

◎名古屋地方　十月十日於刈谷長遠寺「道德の基調」川島常照師、△十六日於常德寺少年少女會、△廿三日前同樣、△同日於淺野宅「佛教の偉觀」川島常照、△廿五日於細澤宅「宗教の發達」川島「偉人論」長谷川義一師、△廿六日於永神堂「信仰の必要」國友龍正、△廿九日於常德寺一千名「要文講義」本多稅下、△廿日於常德寺八百名「日蓮主義綱要」本多稅下、△廿一日於奥町小學校教育會主催民力涵養講演會「國力と國民精神」本多稅下、△同日於一宮歌舞伎座思想問題大講演會一千名「開會の辭」兒玉常宣師「思想は國防の根底なり」丹羽少將「陛下を觀よ」國友文學士「法華經大觀」本多稅下、△同日夜於岐阜市法華寺六百名「人間性の研究」國友文學士「法華經大觀」本多稅下、△十一月一日於四日市安樂寺聽樂滿堂「人の本性」國友文學士、△八日於常德寺妙敎婦人會二百名「人の本性」國友文學士。

◎神戸敎報　十月廿六日三菱造船職工四千名「我國民性」本多稅下、△同日神戸製鋼職工千七百名「我國の正氣」本多稅下、△廿七日三菱職工四千名「神州の正氣」本多稅下、△同日神戸製鋼所一千五百名「國力の基」本多稅下、△同日夜於勸業館八百名「要文講義」本多稅下。

◎津山通信　十月二日於廣戸校處女會「心の修養は美人となるの根本的手術也」、△十二日於上の町敎會所「日蓮聖人正傳」、△廿二日信仰集會、△廿八日於野田村「佛は慈悲也」右能仁一十師出演。

◎盛岡敎報　十月十二日於法華寺「精神修養に付」笹川氏「信仰に就き三大要義」大橋日饗師、△同日夜「佛の感應に就き」笹川氏「日蓮聖人と日本」大橋師、△同夜「法華經の女性觀」大橋師、△十三日「我等の叫び」笹川編松氏「本尊に對する信仰」大橋師。

◎久留米戰報　十月五日於本泰寺「佛敎信仰の正系」中原師、△八日於中垣「釋尊中心の佛敎」中原師、△十二日於本泰寺「三寶中心の思想」中原師、△同夜「龍口法難の起因」中原法學士「淨化されたる信仰」中原師、△十五日於天晴會本部「國民思想の統一」平木氏「既來に於ける勞働問題の研究」中原法學士「聖典の一節」中原師、△十七日於辻宅「信仰の叫び」藤本氏「聖日蓮の癡子吼」中原師、△廿三日於寺崎宅「予が信仰と家庭」後藤氏「日蓮主義の家庭觀」中原師、△十六日地明會「婦人修養に就て」中原法學士「地明會の叫びを聞きて」中原師。

◎大阪通信　十月十日於堂開寺「日蓮上人の生涯」京藤師「法華經の特長」佐藤文學士、△廿二日於同町「衣食住と信仰」宮崎氏「精神生活」京藤師。

緊急廣告

從來本宗東京寺院は必要に應じ信仰を妨げざる限り公共的使用に提供したるが今回更に地方本宗檀信徒及び其の所縁者の上京滯在の便宜を計り實費宿泊所に開放致候

但實費宿泊料は金壹圓五拾錢以內とし地方寺院住職の紹介狀を要す。

大正十年十月　日

顯本法華宗社會部

東京寺院

淺草區老濱島町	(停留場附近)	統一閣
同 區吉野町	(停留場裏通)	國常寺
同 區吉野町	(同　上)	常福寺
同 區新谷町	(十二階裏)	壽仙院
同 區南松山町	(菊屋橫停留場)	法成寺
同 區永住町	(北濱島町停留場)	妙經寺
下谷區池ノ端七軒町		妙顯寺
同 區谷中初音町		本授寺

本郷區駒込蓬萊町（脊町停留場）　願本寺
小石川區原町（指ケ谷町停留場）　本念寺
赤坂區一本木町（赤坂見附停留場）　常玄寺
牛込區原町（柳町停留場）　常樂寺
同區早稲田南寺町（早稲田終點）　正法寺
四谷區南寺町（鹽町停留場）　法恩寺
市外巢鴨町染井　蓮華寺
市外高田町雜司ヶ谷　本敎寺
右同所　寬受院
市外品川町南品川（青物横丁停留場）　妙國寺
右同所　眞了院
市外品川町南馬場停留場側　妙蓮寺
右同所　本光寺
右同所　本樂寺
右同所　清光院
市外入新井町（大森停車場約五丁池上道）　善慶寺

緊急廣告

時代に鑑み日蓮主義者の爲に常德寺、靈山寺、法道寺建物を開放す。

一、名古屋市に來往する人の爲に宿舍として常德寺靈山寺を提供す。

一、名古屋市に滯在する人の爲に宿泊所として法道寺を提供す。

右各項共に賄は自炊又は食堂に於て便せられたし。

一、名古屋市に在學する學生の爲に監督寄宿舍として常德寺、法道寺を提供す。

夜具損料等の必要ある人は豫め通報し置かれたし、多人數宿泊も同樣の事、但し日蓮主義を誤解せる千ヶ寺詣り等は謝絕す。

名古屋市中區新榮町　常德寺
同市中區古渡町　靈山寺
同市東區田代町　法道寺

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓九拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民敎化　金貳圓貳拾錢
○法華經　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢
○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷迄既刊　送料一部金十八錢牛年前金送料不要
○法華經要文　普製金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○佛教信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙蓮寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金參拾錢　送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢　送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大正十年十一月廿七日印刷納本
大正十年十二月一日發行
東京府荏原郡品川町南品川四百七十二番地
（第三百二十三號）

不許複製

編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內
編輯所　統一編輯所

統一第三百二十三號
明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正十年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

293